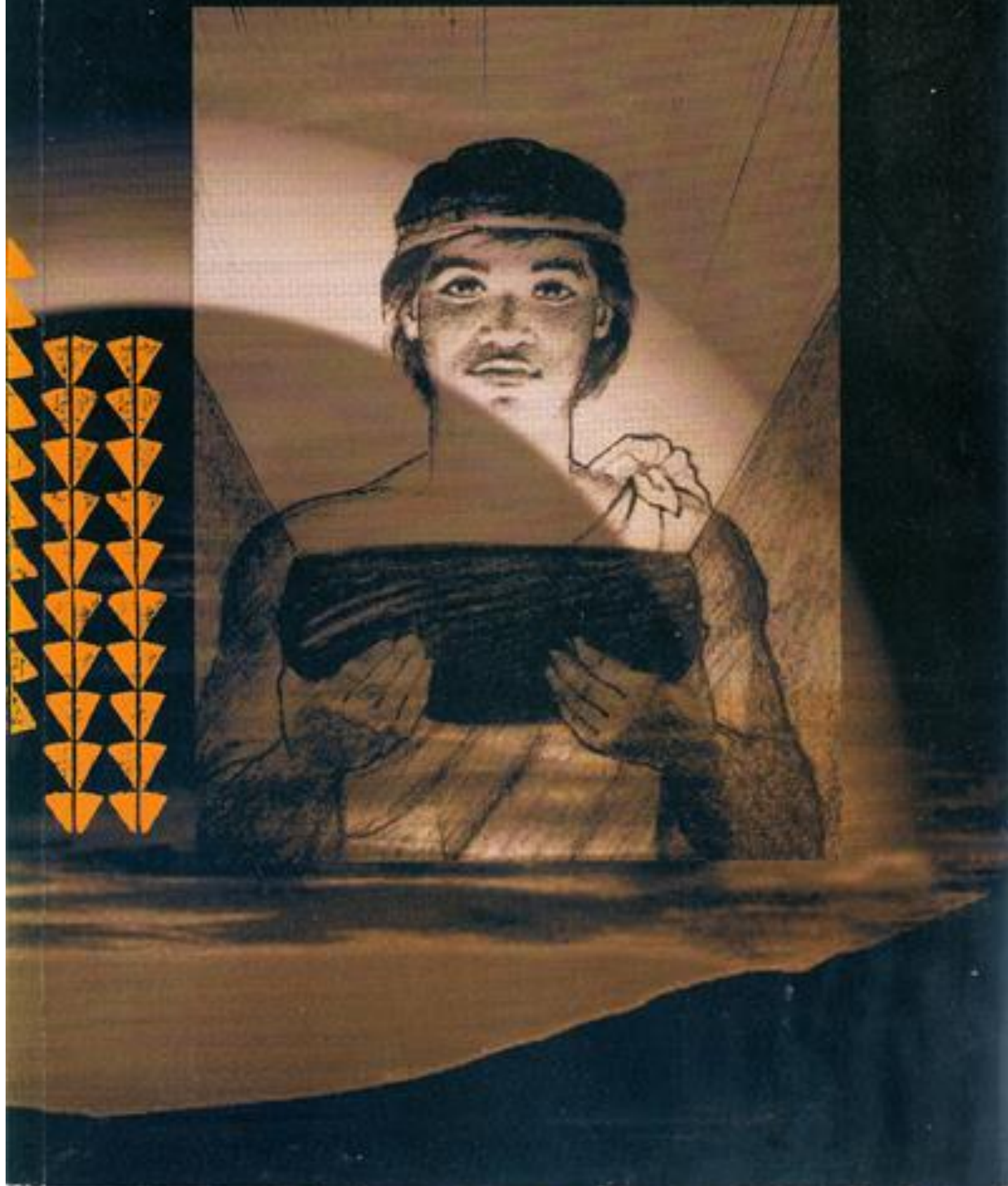


Tales from the Night Rainbow

Koko Willis and Pali Jae Lee



Mo'olelo o na Pō Mākole

夜の虹の物語

モロカ'イ島に住むカイリ'オヘ カメ'エクア
(1861-1931) による
文字に記されず伝承された
ハワイの島と人々のお話

著者： ココ ウイリス&パリ ジェイ リー
翻訳：カミムラ マリコ

家族用出版 -1986
第二版 -1987
第三版 -1988
修正／拡大版 -1990
第四版 -1994
第五版 -2001

Native Book Inc.
1244 North School Street, Honolulu, Hawai'i 96817
1-800-887-7751 (808)845-8949

カバーデザイン：ハンス ロッフエル
イラスト：ジェームス スティックニー
‘オヘ カパラ（竹の版のデザイン）：フィリップ マークウォート

この本は物語形式で語られています。
すべてモロカ’イ島のカマロに住んでいた

私の祖母である、カイリ'オヘ カメ'エクア
(1861-1931)に聞いた話です。

虹にもいろいろな種類があります。夜に虹が出ることもあるのを知っていますか？ 月の廻りに現われるリングは単に天候の状態によって現われます。もう一つの虹、ナポー マーコレ（またはモコレ）は滅多に見ることができません。マーコレは虹のスピリット(霊体)です。私たちの先祖の集合体として現われます。これを見たということは、肉体を離れた先祖たちからの多いなる祝福を受ける事になります。その時には大きなヒーリングが起ります。先祖たちが私たちに必要な事を認識して手助けしてくれます。智慧をもらったり、弱っている時には充電してくれます。夜の虹は、地球上で起きる最もすばらしい祝福の体験です。

Ho'ola'a

ホ'オラ'ア

奉献

'Āmama, Ua Noa, Lele Wale

アーママ、ウア ノア、レレ ヴアレ

今カプーが解かれ(解禁)、ことばが自由に飛んで行ける時が来た

先生、最愛の人、長老である

カイリ'オヘ カメ'エクアに捧ぐ

モロカ'イ島、その神々、その守護霊、その土地に捧ぐ

すべての「ライト・キャリアー」に捧ぐ：マルコム・チュン、サム・カ'アイ、アイ
ナ・ケアヴェ、アール・ネラー、カレン&レイ・ラヴェル、ムイ・ラング、フランク
リン・ベーカー、ビー・オルソン、レレ・ヴァヒネ・グルドン、マリア&カヴィカ・
マックレランド、

私たちの子供たち、

そして世界中で光を灯している名もないすべての人々へ

Me Ke Aloha Nui

大いなる愛を贈ります

パパ クヒクヒ

目次

ホ'オラア	
奉献	7
パパ クヒクヒ	
目次	8
マハロ 'オーレロ ホ'オマイカイ	
感謝の意	9
'オーレロ-ハイ-ムア	
はじめに	10
ホ'オフイ	
序文	12
カ ポ'エ カヒコ	
古代の人々のお話	14
ナー アリ'イ	
チーフたち	18
ナー 'オハナ カフア	
家族のシステム	21
ハカハカ レオ オ バイ オーウリ	
予兆、霊力、予言者	29
カ カフナ カフア ハウア	
カフナのシステム	38
マナヴァ マウ ロア アク	
永遠の時空	44
フリアウ	
変化の時	48
カ ホペナ	
エピローグ 終章	56
付録 A - 死亡記事	57
付録 B - 1880年の国政調査員が残した言葉	58

付録 C — カモ'オ	59
付録 D — モロカイ島の重要な地名	60
付録 E — 家系図と歴史	69
付録 F — アロハと同窓会	78
付録 G — 古くからある事実に新しい光を見いだす	81
参考文献一覧	

Mahalo 'Ōlelo Ho'omaikai'i

マハロ 'オーレロ ホ'オマイカイ

感謝の意

編集のすべての面において助けてくれたカレン ラヴェル。常に応援してくれ、家系に関連する場所などを探すのを助けてくれたデディー マヒ'アイ。家族の物語としての絵を手がけてくれたアーティスト、娘、友人であるマリア・マックレランド。日付やデータの確認をアシスタントしてくれた Children's Mission Society Library と Hawaiian Historical Society のスタッフの皆様。

Me Ke Aloha Nui

本当にありがとうございました。

‘Ōlelo -ha’i-mua

オーレロ-ハイ-ムア

はじめに

この本は、カメ'エクア家の子供たちに贈る為、家族に伝わる数々の話と思い出をまとめる事が目的ではじまりました。長老たちは、子供たちに自分たちがどういう人だったか、また家系の歴史を知ってほしいと思って記録しました。

その後 1983 年に長老たちが、ハワイの昔の事を知ってもらいたいと願って、この本の内容をモロカ'イ島やハワイアン以外の家族にも紹介しようと考えました。歴史家や人類学者たちの書いたものと異なっている内容もあるかもしれませんが、私たちハワイアンは、このように伝授されてきた事をここに記します。

カウアココウラ クハイモアナ カイマナ ウィリス

ティオドール ケリ'イカヒ マヒ'アイ

ジョセフ ウミオリロアプアカレフア ナカガワ

グレゴリー カメハメハ アイ-ル'アウ ケリイヌイ

上記：まとめ役であるカメ'エクア家の長老たち

写真

雄大なるハラヴァ

写真上

ティオドール マヒ'アイとジョン ココ ウィリス

写真左

ジョセフ・ナカガワ

写真右

グレゴリー・ケリイヌイ

'Ohana Kame'ekua

まとめ役であるカメ'エクア家の長老たち

Ho'ohui

ホ'オファイ

序文

長老たちは意見一致で真実を自分の孫たちに、そして家族以外の他の種族*¹の家族たちにも明かすことを決めました。

歴史とは、いつしか人の見方で変えられて伝わっていきます。多くの場合、ある研究家が推測をもとに歴史はこうだったと決めつけてしまいます。しかし、そのほとんどが全く正確ではないのです。

どうしてそのような偽りが伝わってしまったのか？ 私たちもそれを単に推測することしかできません。語り継がれる場合には、一語一句全く同じに伝えていかなければ、当然変わっていってしまうでしょう。もう一つの理由があります。それは、我々ハワイアンにとって恥ずべき事です。ハワイ²の人々はハオレ（白人）が何を言っても信じるだろうと適当に話を作りあげて教えていたのです。ハオレたちは、ハワイアンを無作法な野蛮人だと見なしていた事、自分たちの神々、法律、土地を奪われ、何よりもハワイアンとしての人道を奪われてしまった事へのある意味で「仕返し」的な行動で、「ちょっと怖がらせてやろう」的な感覚で作り話を教えたのです。

¹ ハワイには家族によって守護する動物霊があり、カメ族、トカゲ（龍）族、サメ族、フクロウ族、タカ族、雷族などがある。

² ハワイは、正式には「ハヴァ'イ」と発音するが、読みにくいので、ハワイのまま通します。

その話が外国人からまた現代のハワイに逆輸入され、今では自分たちの先祖が本当に人間を丸焼にして、キャプテン・クックを食べた人食い人種であると信じているハワイアンがいるのです。他にも偽りの物語はたくさんあります。もうこれは冗談ではすまされません。ハワイの歴史はほとんどがフィクションになってしまったのです。どうしたらこの間違いを正す事ができるでしょうか？どうしたら、また子供たちにハワイアンとしての誇りを持たせる事ができるようになるでしょうか？

私たち家族は、大変に恵まれていました。偉大なる祖母カイリ'オへの存在があったのです。小さい頃は、自分たちの話は自分たちの家族の中だけに納めておくように言われました。外の話は適当に聞き流し、真実は自分の中にとどめておくようにと。祖母は子供たちが真実を知り、私たちがどのような人間であるか自覚しておく事がとても大切であるという事を知っていたのです。

祖母カイリ'オへの子供のうち二人の娘だけが、この家系の歴史を受け継ぐ事に興味を持ちました。祖母からの話は彼女達とその子供たち数名によって存続されてきました。今日、その数名さえもこの世を去りつつあります。そこで、この物語を印刷物として残す事の重要性を感じました。祖母カイリ'オへの智慧をこれから生まれてくる子供たちの為に残したいのです。

祖母が17歳の時、はじめてモロカ'イ島にアメリカの宣教師達が訪れました。その宣教師たちが持って来た聖書に祖母は大変感動しました。バイブルには、すべての物語と系統図が記録されており、誰かが内容を変えてしまう心配もなく、その通り引き継がれていく本になっていたのです。祖母はいつかハワイの人々の為に同じ様なものができる事を想像し夢見ました。

ハワイの歴史を語る本は多く出版されていますが、ほとんどが外国人によるものです。数少ないハワイアンによるハワイの書物はハワイ語で書かれていました。それを翻訳した外国人は、また英語にする際に書き換えている内容が多いのです。例えば、デービット・マーロの書いた「ハワイアン・アンティーク」という本はハワイ語でも出版されていますが、それを翻訳したN.B.エマーソンは、キリスト教からの視点で都合の悪い部分は書き換えてしまっているのです。

この物語は、モ'オ族（ヤモリ、とかげ〜龍を指す）であったカイ-アケア家の歴史を伝えるものです。1世紀を4世代と考えて、少なくとも紀元後800年頃から存続した家系です。祖母は、このカイ-アケア家の孫娘でした。そして、その家系の歴史とチャント（聖歌）を引き継ぐために選ばれた者だったのです。祖母は、1816年生まれで、カメハメハ1世の時代でした。智慧を教授する為にマカ ヴェリ ヴェリという人にハナイ（養子）にとられました。とても覚えがよく、まだ幼い頃にすでに楽しいポール・バンヤンのストーリーのようなチャントは、全部覚えてしまいました。その後歴史的なチャント、そして家系を物語るチャントを覚えていきました。1840年に、祖母のハナイとしての母であった親愛なる先生が他界するまで学びを続けました。

キリスト教の宣教師たちがモロカ'イ島に来たのは1832年でした。最初はカルア'アハにピリという草で教会を建て、その後珊瑚で建て直し、祖母はそれを何の疑問もなく手伝いました。ダミアン神父が到来した時にも教会を建てるために作業員を集める等の手伝いをしました。外国人がもって来たものが良いものであると受け入れていました。それと同時に自分たちのものも大事にしなければいけないという事も認識していました。調査員アビー・フォルナンダーは、ハワイの歴史について調査していた

時、デービット・マーロや他の者たちにカイリ'オヘに聞くように頼んだのです。そして最終的には本人が祖母の所に来ました。祖母はすでに何を話すか慎重にならなければいけない事を知っていましたので、あまり多くは語りませんでした。祖母はカメハメハの統一と独裁時代を経験し、ハワイの島々が欲深い白人に占領され暫定政府となった歴史を目の当たりにしてきたのです。さらに米国の領地となった時代に他界しています。この歴史の物語は、その祖母カイリ'オヘと彼女の家族が知るハワイを書き記したものです。現在ではあまり知られていないハワイです。それは神秘的で、夢のような愛のある場所で、すべての人々が兄弟として平等に暮らしていたハワイです。

曾孫であるパリとココによりここに記録する。

Ka Po'e Kahiko

カ ポエ カヒコ

カイリ'オヘが話す古代の人々

他のことと同じように、「歴史」もまた山のどこに立っているかで見方が変わります。

みんな同じ山を登っています。しかしその山はいく通りもの道のりがあり、それぞれの道には異なる景観があります。一人の人間が一つの道を登って行く時に見えるものをその人なりに認識し理解して行き、また登りながら景観（理解）が変化していきます。山の頂上に辿りついて、はじめてすべての人類の見方が見え理解できるようになります。しかし、私たちの中で山の頂上に辿りついた者はいるでしょうか？明日には、また新しい見解をみつける事でしょう。私たちはまだ成長過程にいるのです。

今までに書かれたハワイの歴史書物のほとんどは、外国人が辿った道からの景観を見て理解したハワイの歴史です。ハワイアンから見たものではなく、ハワイアンの道を歩いた見解でもありません。これからお話する歴史はモロカ'イ島に住む私の家族が歩んだ道からの見解です。この話は、カイ-アケアから私の先生であり愛する母カ'ア カウ マカ ヴェリヴェリ（今後はマカ ヴェリヴェリとだけ称す）に語り継がれ、私たちのカプアレイにあるハラウ（学校/教室）で教えられた内容です。

古代ハワイ人はハワイにマオリ（先住）していた人の事をいいます。700~800年前にタヒチアンが我々の島々に到来し、それ以来私たちのイメージはタヒチアンのものと同類視されてきま

した。多くの部分で私たちとタヒチの人は似ていましたが、ある意味では私たちは光と闇程に異なっていました。古代ハワイ人は、廻りすべてに偉大なるマナ（パワー）をもたらすような生き方をしていました。それは、愛の力、すべてのものが自分と同等であるという考えを元に成り立っていました。

私たちの先祖は、家族という小単位のコミュニティーで暮らし、長老たちの導きの元に生活成り立っていました。家族は‘オハナと呼ばれ、そして親族はみな‘オハナ ラハと呼ばれていました。現代ではそれを「種族」と呼んでいます。古代は、たくさんの種族が存在しました。それぞれの種族は、同じ色のカパ（衣服）をまとっていましたが、種族の中の枝派によって、そのカパに描かれている模様が異なっていました。見知らぬ人に出会った時に、同じ色のカパを来ている事で同じ種族であると事を認識し、更に模様でどの家族の系統であるかが判断できたのです。

それぞれの家族には、‘アウマクアというものが存在しました。それはスピリット（霊）であり、家族の一部として共に今を生きていて先祖のような存在です。私たちの事を見守り、道が分かる時にはどちらに行くべきか導いてくれる存在です。このスピリットは、家族の一部であると同時にすべてでした。私たちの家族はモ‘オ族です。モ‘オとは、巨大なトカゲあるいは龍の事です。でも、私たちはどんな小さな生き物にも優しく接してきました。私たちは皆兄弟ですから。ただ、トカゲ類にはより親近感を持っていました。私たちは、‘アウマクアであるモ‘オが自分たちに幸運を運び、守護し、見守ってくれていると信じていたからです。

私たちの家族は、女性は髪を肩までの長さに整え、男性は短いあごひげを伸ばすのが仕来りでした。他の家族では、髪を短くし、ひげを抜く仕来りの家族もいました。カネホアラニのすべての子孫（カイヤケアの一族）は、神聖な人生を歩んでいるという証として指にタトゥー（入れ墨）を入れるのがしきたりでした。他の家族は、体の違う部分にタトゥーをいれる人たち、あるいは全くタトゥーを入れない家族もいました。

古代はたくさんの種族が存在しました。それぞれに特異な色と‘アウマクアをもっていました。サメ族の色はグレー、貝族は濃い赤、フクロウ族は茶色のカパをまといました。マウイ島の雷族は、最も濃い黒をまといました。オアフ島のリーワード家はオレンジ色、コオラウロア家はとても美しいピンク色のタパをまとった種族でした。大変美しい赤のタパで、それぞれに違う赤にはカネカパ、ケ クパ オヒとケ アクア ラフという三種類がありました。

モロカイ島の神々はクーとヒナでした。聖地（ヘイアウ）には、男性神クーを象徴する立石があり、女性神であるヒナを象徴する横ばいの平石がおかれています。私たちの家族のヘイアウには、常に灯りが灯されていて、必ず火の見張り番がいました。

私たちの家族は、ハワイの”はじまり”からここに住んでいたと信じています。中には東や西の方角へと移住して行った人たちもいます。そのような話を伝える歌が残っています。

私たちの伝統はすべて物語あるいは寓話として語り継がれてきました。私たちにとって最も古くそして重要な話を一つここで紹介しましょう。



「すべての子供は、完全なる光のボール(器)をもって生まれきています。その光に忠実に進んでいけば、どんどんその光は強くなり、どんな事でもできるようになっていきます。サメと一緒に泳いだり、鳥と一緒に空を飛んだり、すべての事を知り、できるようになっていきます。でも、もしもその子が人を羨んだり、嫉妬したりするとその光の器の中に石を投げ込んでしまう事になります。そして光は小さくなってしまいます。光と石は同じところにいる事ができないのです。もしもずっと石を投げ込む事を続けていけば、光は完全になくなり、その子は石になってしまいます。石は育つ事もできず、動く事もできません。でもある時、石でいる事に疲れて、そのボールをひっくり返し石をすべて器の外へ出してしまえば、また光は輝きはじめるのです。」

このようなお話は、教えであり、忘れていたことを思い出させてくれるものでした。先住の民は、鳥、木々、種、魚、大地、海、空の話をもっていました。これらは、人々にとって誰にでも身近にあり理解のできるものだったからです。幼子がしゃべりはじめる頃からその子が関わる世界について教えていきました。

アロハとは、自分が廻りすべての一部で、
廻りすべてが自分の一部であるという事。
痛みがどこかである時、それは自分の痛み。
喜びがどこかである時、それは自分の喜び。
だから、それがすべて創造主の一部であり、
自分の一部として尊重します。
私は故意に人や生き物、物を痛めつけたりしません。
食べ物が必要な時には、自分に必要なだけ取り、なぜ取るか説明します。
大地も空も海も私のものです。だから大切にし、尊び、守っていきます。
これがハワイの生き方！これがアロハ！

古代の人々は、すべては「今」起きていて、私たち一人一人が創造主として自分の人生を創り上げる事ができると信じていました。私たちは自分で自分を創り上げていて、人生に関わるすべてのものも自分の一部なのです。どんな状況もすべて私たちに学びをもたらす為に起きているのです。自分の置かれている状況を変えたい時には、単に今の自分の状況を手放せばいいだけです。反対にそれが自分の為になる問題だと思ふ時には、それを放さずつき進んでいけばいいのです。

古代の人々は、生命体という一つのものに私たちすべてが属していると信じていました。土地も海も空も、すべて自分の一部と見なしていました。土地に生えるすべての植物、海に泳ぐすべての生き物は兄妹と見なしていました。私たちはすべての一部ですべては私たちの一部である事を昔の人は知っていて、それに従って生きてきました。それを破壊するような行為はしませんでした。植物に話しかけ、何のために使うのかを説明しました。岩を家の一部としてあるいはヘイアウの一部として使う前に、そのように使っても良いかどうか岩にお伺いをたてました。岩が反対の意志を表すサインを送ってきた場合には、また他の場所に行き他の岩を探しました。正しくものごとを進める事の方が、急いで仕上げるよりもずっと重要であり、それが後にどのような影響を及ぼすかを理解していました。

マナ（個人の内なる力）が強く、自分がパワフルな存在である事を自覚したなら、不可能はないと教えられてきました。例えば、岩を一つ動かすにしても、岩に動く意志があるならば、そんな大変な重労働ではなくなるのです。人が岩をかつぐのですが、その岩の重さを感じる必要はないのです。

このような学びは、人生のいろいろな場面で活用されました。特に魚を釣る時や食べ物を調達する時、必要な量が明らかになるとその分だけ手に入ったのです。それ以上の欲はありませんでした。そして何も無駄にしませんでした。

古代の人々は、人と人の間に境はないと言いました。弟を殴るという事は自分を殴り、またお父さんとお母さんも殴る事になるのです。それなら誰も殴らないのが一番いいわけですが、古代は、王もいなく、偉大なる戦いに打ち勝つチーフ、軍隊、法律などありませんでした。

西暦 1250 年頃、パ'アオという神官がタヒチからやって来ました。その頃、すでに多くのタヒチアンが到来していましたが、タヒチアンの事は既によく知っていました。この土地に来る人はすべて歓迎し、住まいなどを作るのも手伝いました。大概の人は、すぐに私たちのライフスタイルに馴染み、家族間でも平和に暮らしていました。そのような人々はハワイアンとして見なされました。どこから来たかは重要ではありませんでした。心（カナ'アウ）を見て聞いていました。

パ'アオは、色々な意味で目立っていました。まず白を着ていた事です。私たちは着ない色でした。なぜなら、白は生命のない色と見なされていたからです。彼と一緒に来た人は、タヒチの赤色のマロ（ふんどし）を巻いていました。その色は私たちにとっても馴染みのある色でした。パ'アオは、すべての島を歩いて廻り、ひたすら質問をして廻りました。人々は、親切に彼の質問に答え、

港の事、潮の事、肥沃な谷間の事などについて答えました。みんな何も疑わずにただ質問された事に素直に答えたのです。するとある日突然に彼は姿を消しました。皆お互いに彼の事を話しました。このような事態は体験した事がなかったのです。人々は、彼の事を「死の装いの人」と呼びました。衣服が色に染められていなかったからです。

数年後、パアオが実にその名の通りの人物である事がわかりました。彼は私たちの島々に大惨事を運んで来たのです。

Nā Ali'i

ナー アリ'イ

チーフたち

私たちにとって、彼らは侵略者でした。パアオは、タヒチに戻り、何千人もの軍隊を率いてハワイを占領するために戻ってきました。タヒチの男共は背が高く、獰猛な戦士たちでした。彼らは光の力を信じず、拳の力を信じ、その強力な軍隊は多くを殺し、盗み、略奪していきました。

ラナイ島の人たちが最初に侵略されました。彼らは言いました。「赤いマロをまとった侵略者がどの地平線にも連なっていて、それは海が赤く見えた程多かった。」海はじきに本当に赤く染まっていきました。私たちの民の血で染まっていったのです。多くは無惨に殺され、残った者は奴隷扱いを受けました。中には、安全なカウアイ島に逃げる事ができたハワイアンもいました。カウアイ島に辿り着くには、その荒い潮の流れを熟知している必要がありましたので、タヒチアンがそうそう近づく事はできなかったのです。ボードに乗り遅れた者たちは、山の中の洞窟に潜んで暮らしました。捕まった者たちは、漁のエサ代わりに使われ、生け贄にされ、その骨はタヒチの神々の像であるティキを飾る装飾に使われました。

タヒチアンは、土地を支配する自分たちのチーフの事をナー・アリ'イと呼び、我々の民をマナ・フネと呼びました。その呼び名は「パワーが小さい」という意味で、私たちを完全に馬鹿にしたものでした。実際に、元来のハワイアンは、非常に背も低く小柄でした。そして槍やこん棒などの武器を使った事ありませんでした。古代ハワイ人は、意識を使って世界と調和してききましたので、戦いやその為のチーフ等は必要なかったのです。すべての男性は、漁師あるいは農家の人たち

でした。穫れたものは、コミュニティーの皆と分かち合って食べたのです。戦士となるには、それなりの訓練をしていないと戦う事はできません。彼らは意識の力をパワーとしては考えず、武力をパワーと見なしたので、我々の民をマナ・フネ「パワーが小さい」と称したのです。

古代ハワイ人の中には、メネフネという人の子孫だったものもいました。彼は16人の息子をもっていました。その二つの名前が似ていたため、後にタヒチアンが侵略してくる前からいたハワイアンをメネフネと称するようになります。実際には、タヒチアンが到来する前から色々な種族が混じっていました。あるグループは、自分たちの事をムーと呼び、島の名前もムーと呼んでいました。家族単位では、名があり一般的にはその名で呼ばれていました。カウアイ島には、カマ・カウ・ポーとナヴァオがいました。オアフ島にはラエとパエとケアがいました。マウイ島にはアフとイとたくさんのラエがいました。家族によっては、名を持たず、'アウマクアの名称だけを使う人たちもいました。

私の祖先であるモロカイ島の人々の祖先は、カ・ポ'エ・アオ・ヒヴァ（光の保持者、あるいは聖なる光の人）と呼ばれていました。モロカイ島に住む他の家族には、光あるいは虹にまつわる名がつけられていました。

メネフネの偉大な功績を伝える伝説や物語は、すべてアリイたちに強いられ、短期間に生け簀やヘイアウや塚を作らされた事から発祥したものです。アリイたちは、マオリ（先住のハワイアン）に仕事を命令し、あざけ笑って去って行くのでした。与えられた期間内に仕事が完成していない時には、そこに従事した者は皆殺しにされたのです。

無理な命令が下された時には、山の上の洞窟に潜んでいた仲間たちも降りてきて一丸となって働きました。その仕事は夜に行われました。日中は他の仕事をさせられていたからです。その島に住む仲間だけでは間に合わない時には、火の玉を空に飛ばし、他の島に合図を送り助っ人を呼びました。

朝日の最初の光が現れる時には仕事は完成していなければなりませんでした。その頃には、他島から来たボートも去り、山の洞窟から来た者たちも完全に姿を消していました。全く他に人がいた気配は残っていません。アリイたちは、この少人数でこれだけの仕事をこなすのは不可能であるから、先祖の幽霊たちが夜やって来て手伝っているのだと思い込んでいました。夜に山から人びとが降りてくる気配や音を耳にするとアリイたちは恐れ隠れました。山にはハワイアンの先祖の墓がある事を知っていたからです。ナイト・マーチャー（夜の幽霊たちのマーチ）の伝説もこれに由来します。実際には、幽霊ではなく生きた人間たちが山から降りてきたのです。山に隠れ住む者たちは、血に飢えたアリイたちに絶対に頭を下げたくないと、頑なに時が経ち平和が戻るのを待ちました。家族によっては何世代も山の中で暮らしたあげくに、二度と昔のような時代が来ない事に気づかされる事になります。

アリイたちはチーフという階級システムを持ち、それに従って生活をしていました。戦いは生活する為に必然であると思っていたのです。すべては武力で奪えると考えていました。彼らは常

に戦っていました。兄弟も喧嘩し、父と息子もまた争っていました。心に平和を持つ事なく毎日を過ごしていました。でも戦いというのは誰も勝利する事なく、本当は皆負ける（失う）のです。

モロカ'イ島に住む私たちは、他の島々に比べて大きな影響を受けませんでした。アリ'イたちは、モロカ'イ島の人々がすごいマナの力を持っていると恐れていたので侵略されませんでした。

その理由は、パ'アオの一軍がモロカ'イ島を侵略しようとした時、モロカ'イ島の住民が全員海岸線に一直線に並んで待ち構えていたからです。彼らは逃げずにいました。静かにただ立ち並ぶ群衆でした。拳を上げる人はいませんでした。侵略軍がボートを岸にあげようとし始めると、一斉にチャント（祈りの歌）を歌いはじめました。声はだんだんと大きくなり、圧倒されるような鳴り響く音声に変わっていきました。槍をなげても届かず、岸に上がろうとした者は後ろに転び、波にのまれて息も絶え絶えになりました。そして引き上げていったのです。それ以来、彼らはモロカ'イ島の事をプレー'オー'オ（パワフルな祈り）と呼びました。その後も何度か侵略を試みましたが、毎回同じ結果となったのです。

時が経つにつれ血は混じっていきました。アリ'イが到来する前から居た先住民を聖なる存在とみなすようになり、その者と結婚する事でアリ'イは、聖なるチーフと呼ばれるようになります。タヒチアンは、我々を征服する為にやってきましたが、反対に自分たちが征服されたと見る事もできます。我々のチャントを自分たちのものように活用しました。私たちの教えや寓話も自分たちのものように広げました。たくさんのアリ'イたちがモロカ'イ島を訪れ、友人や家族のように過ごしていきました。そのアリ'イたちは、私たちに命令するような事はありませんでした。アリ'イの子供たちの一部は、ハワイの智慧をすべて学ぶためにモロカ'イ島の長老に預けられました。その何人かは尊敬に値するすばらしいチーフに成長しました。何人かは、愛の意識よりもまだ戦いという栄光に魅了され、戦死していきました。戦士に戻った者もいましたが、そうでない者もいました。

私たちにとって彼らは侵略者です。我々の女性とヘ'イ'アウを略奪しました。堂々とひれ伏す我々の頭の上を歩き廻り、食べ物でもなんでも欲しいものは持っていきました。一部を除いたほとんどのアリ'イたちは、我々に命令を下し、一般人（平民）と呼び差別しました。我々は一般人ではありません。古代の民であり、彼らが赤いマロをまとって侵略しに来るずっと昔からこの土地に住んでいたのです。彼らは征服し手を上げ、暴力をふるいました。しかし最後には、多くの智慧を我々から学び、武器を捨て、素朴な光の器を拾いあげていきました。

OHANA

オハナ

Ka 'Ohana Kahua

カ 'オハナ カフア

家族のシステム

生活は、コミュニティー社会として成り立っていて、家族の財産はコミュニティー全体のものとする事が原則でしたが、個々の財産はお互いに尊重して扱われました。誰かの持ち物は、その人の一部だから、それを勝手に持って行く事はその人に背く事になります。盗みは、所有者のマナを取り上げる事になり、盗みを働いたものは家族から追放されました。盗みは、最も大きな過ちあるいは罪（罪という発想は白人の持ち込んだ概念）とされていました。誤解が生じて、誰かが誰かの事を咄嗟に怒り出し、それが喧嘩になる事がありました。それはまだ理解の余地がありますが、盗みの場合、まず計画的である事と悪いと知っていて故意に人を傷つける事になるのです。

アリイたちは盗人を死刑にしました。私たちはしませんでした。追放される事の恐れを目の当たりにするだけで充分効力があったからです。私は、それを実際に目撃しましたが恐ろしい出来事でした。家族会議の中、皆の目の前で、「もうおまえは存在しない事にする」と言われるのです。一切誰とも口を交わす事はありません。完全に無視され、目の前を歩いていてもいないように振る舞われます。彼らは“カウヴァ”（アウト・キャスト）になります。死んだ事になります。家族の先祖（死者）は敬うので、実際には死者以下の存在になるのです。盗人たちは、やがて海に身を投げ

て自殺するか、島を去り二度と顔を見る事はありませんでした。二度とその者の名前を呼び事はできませんでしたので、行方を人に聞く事もできませんでした。これが家族間のルールであり、私の知る限り今でも変わっていないと思います。この追放のルールはとてもパワフルな効果があり、それ以外の法律は必要ありませんでした。

子供が生まれた時には、家族からその子供にマットとていねいに打たれたカパ（木の皮から作る衣服）の生地が贈られます。この贈り物はその子の一部として丁重に扱われます。その子が生きている限り、許可なく他人がそのマットの上に載ったり、カパに触ったりする事はしませんでした。時と場合により、許可をもらって他人がマットの上に座ったり、寝たりする事はありました。人のカパの下をはう事は消してしてはいけない事でした。寝る時は、皆自分のカパをカバーにして寝ました。戦いに出る時、マカヒキ祭のゲームに参加する時、仕事で旅する時など、どこに行く時でもマットとカパは必ず一緒に持っていきました。死んだ時も一緒に燃やされます。

マットを共有して一つのカパの下で二人が寝るという事は結婚しているという事でした。単なるひと時の情事であった場合、マットは共有されるけれども、カパはかけませんでした。カパを共有するという事は男性と女性がお互いにそれを認めた場合のみでした。

もう一つのルールは、自分のヒョウタン製の器が決まっていたという事です。人が人の器を触る事はカプー（タブー）でした。このルールに対して年長者の方が若者よりも厳しかったです。お年寄りには実際に人が人の器から飲み食いする事で病気になる事を見て来たからです。大きなポイ（タロ芋を搗ってトロトロにした主食）・ボールと魚をよそう皿だけは、皆で共有するものとされていた。但し、個人の器はカプーでした。

長老たちは、マットを数枚とカパと自分の器を所有していました。そして家族の決まった若者がそれを管理するというのがしきたりでした。アリイたちは、自分の弟あるいは弟の息子にすべてを管理させました。飲み食いの器、たんつぼ、髪やつめを切る道具、数枚のマット、数枚のカパ、これらすべてを持たせました。それを任された者は、従事するアリイの影を踏む事も許されていて、これは大変名誉な事でした。

モロカイ島に住む私たちの家族は、アリイたちに直接支配されてはいませんでした。私たちは、多くの経験を重ね賢い自分たちのクプナ（長老）たちの支持の元に生活を営んでいました。このクプナたちの中にカフナ（専門職の達人）もいました。長老たちが家族間のすべての問題を扱いました。他の家族との問題やアリイとの衝突も請負ました。

家族の所有する「色」は、家族のものとして最も大切に扱われました。これはどの家族：アリイたちもマカアイナナ（アリイの血縁でない者／直訳すると“土地の目”）も同じ価値観を持っていました。自分の家族の色は自分のアイデンティティーでありプライドでした。

他の家系の色を使うというのは、大変馬鹿げた行為でした。敵のあるいは自分よりも高位な血筋の色であるかもしれず、トラブルを招くだけです。他の色を使用するという事は自分の家系に

誇りを持っていない事になってしまいます。自分の家系の色は、自分たちにとって神聖なものでした。

家族間で従兄弟、姉妹、兄弟、半分姉妹、半分兄弟は、すべてブラザー、シスターと呼ばれました。親の世代は、すべてマクア（両親）と呼ばれました。それよりも上の世代のおじいさん、おばあさんはすべてクプナ（祖父母の総称）と呼ばれました。祖父母一人を呼ぶ時には、“トゥトゥ”あるいは名前と呼ばれていました。皆愛し愛されていました。家系の歴史を唄うチャントを覚えていなければ、どのおじいさんとおばあさんが自分の直接の祖父母にあたるのかわかりません。皆そんな事はどうでもいいと思っていました。子供は一組の両親のものというよりも皆の家族という様に考えられていました。

家系を語る時には、“a”(ア)を入れて名乗ります。母方の話をする時には、カイリ'オヘ・ア・ケ-カウ-リケ・ア・ルナヒネと名乗ります。父方の家系を語る場合には、祖父の名、その後父の名をつけ、カイリ'オヘ・ア・カイア-ケア・ア・ペ'エルアと名乗ります。自分の実の父母の名がわからない時には、祖父の名のみをつけて名乗ります。モロカ'イ島では、偉大なるラ工家を継ぐ者が多く、またカエとマヒというチーフの血筋の名の三つが最も古くから残っている名です。この家系は、タヒチアンが到来する以前から存続していた人たちです。

ある日カウイ-ケ・ア・オ-ウリ（王カメハメハ3世）がグレート・マヘレを宣告し、アリ'イ・チーフ間で土地を分配する事になりました。ゲリット ジュッドは、王にハワイアンは全員名字を持つべきだと言いました。多くの人たちは、その意味がよくわかりませんでした。

ハワイアンの多くは、自分の実の父親が誰か知らなかったので、家族間でたくさんの質問とクスクス笑いが起きました。私たちにしてみれば意味のない事でした。

ハワイアンの感覚で言えば、土地は個人が所有するものではありませんでした。バオレが宣教師の事務所に現れ、今後どうなるかを伝えに来た時は、皆肩をすくめました。“また外国人のナンセンス”がはじまったというのが一般的な感想でした。数ヤードの布地やワインのボトルを渡され、それと引き換えに土地の権利書と交換する事にハワイアンは特に疑問を持たずに応じました。私たちは馬鹿ではなかったし、非識字者でもありませんでしたが、文化の違いで、それがどういう事なのかを全く理解していなかったのです。私たちの家族は、個人で物を所有するという概念がなく、ほとんどの物をコミュニティで所有するというのが常識でした。土地、空、海は皆のものでした。それをどうやって分解するのか？全く意味がわかりませんでした。

このような変化に伴い、伝統は失われ、新しいルールが社会を支配していきました。新しいルールは、ハワイアンの心には通じない異国のものでした。そしてハワイアンは自分のアイデンティティーを失っていったのです。人々は、異国の考えを理解できず誤解の果てに家族を失い、自分の尊厳を失い、歴史を失ってしまったのです。

同時に、ハワイアンの子供たちは新しい政府に従う学校に通わされる事になります。クプナ（長老／祖父母）の教えとは全く違うものでした。その当時は宣教師たちが先生であり、彼らの視

点からの教えが優先されていました。山のどこに立つかによって、ものの見方が違うように、彼らは彼らの視点から教えたのです。ハワイアン立つ場所からの景観は見ようとせず、それどころか全く無視していました。

島の子供たちは、学校で自分の先祖が人食い人種であったと教わりました。それは全くの嘘です。アリイの時代もその以前の時代もそのような事実はありません。パ'アオの時代、そして最もひどかったウミ君主の時代、アリイたちは生け贄を行っていました。アリイによっては、死刑や生け贄を一切行なわなかったチーフもいました。しかし、子供たちは学校で自分の先祖たちが人食い人種であり、怠け者でいつも水の中あるいはベッドの中で遊んでばかりいたと教えられていたのです。先生たちは、ハワイアンについて"indolent"（生まれつき鈍く怠惰）という表現をしました。その意味は説明されませんでした。とても卑劣な響きに感じました。

私はもっと水遊びする時間があつたらいいなと思っていました。もっと休む時間や愛を交わす時間があつたらどんなにいいかと思っていました。我々の民は生涯非常によく働いていました。助けを求めず、自分たちでできる事はすべて自分たちでこなしました。皆で育て、穫った魚も野菜もみんなで分かち合ってきました。何も無駄にはしませんでした。何かを無駄に捨てたり、必要以上に穫ったりする事は間違いであり、それをした者は後にそれを正す時が訪れると考えられていました。

私の意見では、今"アロハ・スピリット"と呼ばれているものは、すべてが愛からはじまるこの'オハナ（家族）のシステムが原点になっているのではないかと思います。家族への愛、土地への愛、海への愛、自分への愛と尊敬、そして廻りすべてのものへの愛。すべてが一つであるという事です！

西洋の人には、私たちの家族システムは理解できなかったのです。例えば、一世帯に何人も妻がいるのは信じがたい、ハワイアンにはハーレムが存在すると伝えられたのです。妻というものの存在は、現代の一般的な見解とは異なっていました。ハワイでは皆で助け合うのが習慣でした。一家の主が死んだ後は、その一家はどうするのでしょうか？妻や子供たちは、誰が世話するのでしょうか？その主の兄弟や従兄弟の家に行き、妻として入り、以前の家族と同様に扱われます。その女性が他の男性を気に入り、その家族を出てその男性と暮らす事も可能でした。女性の意志は尊重されました。一度だけこんな話がありました。夫を亡くした妻が次に暮らした家の主に大変気に入られ、一つのカパの下で寝る事を要求されたけれど、寝床を共にするのを断った事がありました。その女性が他に好きな人が出来て結婚したいので家を出たいと言った時に、その家の主は嫉妬して、彼女をその男の元へ行く事を許しませんでした。こういう事も極稀にありましたが、たいていの場合には女性の意志は尊重されました。

妻として受け入れられる女性は、時として主のおばあさんに当たる位の年齢でした。主は、もちろん美しく若く、豊満な女性とロマンスを交わしたいのです。その場合、主は同じ階級の美人

の従姉妹や他の女性とロマンスを交わしました。跡取りを作る為には、血縁の姉妹と関係を持つ事が最も良いとされていました。

時折、兄妹が恋愛感情でなく、深く愛し合う事がありました。その場合、女性の方がひと月程隔離され、その後二人は愛を交わしました。そしてその女性は、その後他の男性と結婚し自分の一家を作る事もよくあります。（時には結婚後に兄妹が結ばれる事もありました）一人の女性が違う男性二人の子供を産む事は、異国の人から見るととても不可思議な事かもしれませんが、ハワイアンにとっては自然の事でした。けして一つのベッドからすぐにもう一人のベッドへ飛び込むような感じではありません。

男性が結婚する時、自分の姉妹や母親に夫がない場合には、その家族も一緒に連れて家を築きます。その女性らは、一生涯一家の主と愛を交わす事なく同じ屋根の下で暮らす事もあります。独身の女性は、数ヶ月あるいは数年一緒に暮らした後に嫁に行く場合もありますが、その家にいる限り姉妹や母親であろうと「妻たち」と呼ばれます。妻たちは、一般人でもアリイ階級でも、主と床を共にするか否か本人の自由でした。跡取りを産むべく姉妹でも、それは同じです。セックスは、男性が女性に対して強要できるものではありませんでした。お互いの合意の上で交わされました。

女性によっては、位の高いチーフと情事があった事を自慢する者もいました。この場合、子供ができた時は父親の家にもられる事が多く、時には母親も同行する事がありましたが、妻とは呼ばれません。ただ同等の扱いを受けます。高位のチーフたちは若い女性たちを好みました。ケアヴェ-ケカヒ-アリイ-オ-ナ-モク（ハワイの高位チーフ）は、島々の隅々まで種を蒔いた事で有名です。彼の血を引かない者はハワイのどこを探してもいないと言われる程でした。彼に関しては、誰も拒む事ができなかつたと思います。地位身分に関係なく、皆彼を恐れていました。大変強い戦士で他人の感情等は無視するような人でした。

アリイにも色々なタイプの人がありました。最良のチーフは、マウイ島を統治したカメハメハ・ヌイです。彼は死後の後継者を息子ではなく自分の実の弟カヘキリと自分の妻たちとしました。妻たちの中には、父親ケ-カウ-リケの妻たちであった女性たちもいました。父親の死後、死んだ妻たちもいれば、他の人と結婚して出て行った者もいましたが、残って息子の妻となった者もいました。カメハメハ・ヌイの聖なる妻とされていたナマハナは、主の死後弟の妻となる事を断りました。彼女は自分の土地を所有し、すべての妻たちと幹部らを引き連れていきました。カヘキリは、59歳でとても静かな生活を好む人でした。ナマハナは、楽しい事が大好きな陽気な性質で、パーティーやギャンブルが大好きでしたので、カヘキリと暮らすのは退屈だったのです。カヘキリは、二人の妻と静かに暮らし、泳いだりサーフィンが趣味でした。お酒は一切飲みませんでした。彼はナマハナに対して怒っていました。法律的には彼女の所有する土地も本来は兄から自分が受け継いだ土地なのです。しかしカヘキリは、彼女に対して多くは語らず、彼女の好きなようにさせました。後に一番位の高位チーフになった時も他に妻をとる事はありませんでした。彼は優れたスポーツマン

で孤独を好む人でした。アヴァ（植物の根を搗った飲み物、お酒のような効果がある）は飲まず、海を長いこと散歩したり、一人か二人の男仲間と泳いだり、潜ったりして余暇を過ごしました。

モロカイ島での家族というものは、確固たるユニットでした。完全一体となっていました。家族といっても実際には集団、コミュニティー全体を指し、共に暮らし、共に働き、問題も共に解決し合ってきました。みんな繋がっていて、共に学び合い、助け合い、成長しました。みんな親戚であり、一人一人が一つの手の指であり、大きな母体の一部といった感じでした。

‘オハナは、それぞれクプナ（長老）たちで仕切られていました。すべての年長者がそのグループに属するわけではありません。仕切り役のクプナ・グループに選ばれるには、他の年長者たちが意見一致で認めた者だけでした。そのクプナ・グループは、大きい人から小さい人までさまざま、色々な分野のエキスパートであるカフナ（マスター）たちを含みました。

勤勉で賢く、愛情深く、いつも人に尽くし、家族の秘技を多くマスターしたならば、その名は自然とクプナたちの耳に届き、やがてクプナ・グループに受け入れられます。投票などはありませんでした。みんなの意見が一致すると、その人は、家族会議（‘アハ）において、クプナの幹部サークルに入るように要求されます。簡単に聞こえるかもしれませんが、なかなか複雑でした。

幹部サークルの中のまた長がいます。彼はアリ’イのように独裁的ではありません。常に他の長老たちと相談しながらすべてを進めていきました。他の家族の長と話し合いをする時に代表者として行く役でした。そして、他の家族の様子、ニュースを持って帰ってきて皆に知らせる役割もありました。

アリ’イたちも又長老たちをかかえていました。しかし血縁ではなく、政治的助言者として使命された人たちでした。彼らは評議委員と呼ばれ、西洋人が入ってきた後には枢密院と呼ばれました。評議委員は、ほとんどが男性でしたが（戦争に行く為）場合には女性が使命される事もありました。カ’アフマヌ（女性）は、父親が亡くなった後議席を後継しました。

アリ’イになる女性もいましたが、大概は最初に評議委員を務めている場合が多く、女性のアリ’イが亡くなった時には、重要な役割を務める女性評議委員が後継者となる事もありました。

私たちの家系においては、一人が何世帯かの家族の相談役になって事もありました。マカ ヴェリヴェリは、彼女の父親の元でクプナとして務め、それ以外にも二人の兄妹の家族のクプナとしても務めていました。マカ ヴェリヴェリは、先生でありミスティック（仙人のような神秘主義者）でしたので、家族会議が開かれる時にいつも姿を現すわけではありませんでした。現われる時も必ずしも他の長老と席を共にしませんでした。誰もそれを問いたす事なく、暗黙の了解でした。

家族のメンバーは長老たちを問いたす事はしません。彼らが決めた事は規律として守り従うのが常識でした。彼らは偉大なるマナを持ち、経験豊かな知識を持っていたからです。その理由で私たちのリーダーを務めているのです。心の底で不満があったとしても、不平をもらさず従いました。

クプナたちがすべての‘アハ（会議）と‘アハ‘アイナ（食事付きの会議）を仕切るのがルールでした。家族の問題、家族の一員とその他の家族との問題などすべてクプナたちが取り仕切り解決していきました。‘アハを開催すると連絡があったら家族全員参加しなくてははいけません。生きているなら、死んでいないなら、二本の足を骨折していないなら、参加は必須でした。一切例外なく全員出席しました。

‘アハでは、家族にとって重要な事柄が話されます。また年に一度はマカヒキの感謝祭の計画の打ち合わせが行われます。家族の中に家族の教えを忘れていた者がいれば、その話が持ち出されます。最も頻りに繰り返される教えは、「許すと言ったのに、まだその事を忘れずにいたなら、本当に許した事にはならない。」という教えでした。**許すと忘れるは一つにして考えなくてははいけない。**

もしも「あなたを許します」と言ったにも関わらず、何かある毎にその事件を口にするのは大きな過ちだ。それは自分の光のボール（器）に大きな岩を投げ込む事になるという教えでした。この理由から、多くの年配者たちは過去の事を子供たちに語りませんでした。昔の話をすれば、また古い心の傷、憤りが戻って来るからです。長い事持っていなかった石をまた拾う事になってしまうからです。又、他界した家族にとって不名誉になるかもしれないからです。忘れる事がベストだと考えられ、歴史はクプナたちと共に埋められていきました。

‘アハは、人間である家族とスピリットである家族が同席しました。他界した家族も私たちにっては家族に変わりありませんでした。こちらから話かけ、あちらからも話かけてきます。メレ（歌）やチャント（祈りの歌）等の中にも登場します。食事の前には、必ずすべての先祖の名前をあげ祈りました。異国人は、これを見て、私たちには何百もの神がいるとっていました。そうです。ごもつとも。先祖は神々のように愛し、育ててくれた者たちとして尊重してきました。

‘アウマクアも私たち家族の一員と見なされていました。これをうまく説明するのは難しいですが、守護天使であると理解して頂ければいいかと思います。キリスト教の信者は守護天使がいると信じていますが、私たちにはそれと同様に‘アウマクアがいたという事です。私の中ではこれが一番近い例えになります。‘アウマクアは、私たちのアイデンティティーであり、無くてはならない家族の一員でした。肉体は持たず霊体として存在していました。二つの世界、霊界と人間界の間のメッセンジャーのような役割を持っていました。両方の世界に行き来できる存在でした。私たちの‘アウマクアは、モ‘オ（龍）でした。母方は、雷が‘アウマクアでした。

すべてが一つであると考えるのであれば、私たちはスピリットたち共一つであり、龍や雷も私たちと一つという事になります。それがなぜおかしいのでしょうか？伝統では、カパを‘アウマクアの柄でデザインし、マカヒキ祭の時のゲーム大会では、それを旗にして活用しました。それを掲げる事で霊家族のマナを引き出す事ができると信じられていました。それは恐れるものはなく、単にゲームに挑む楽しみの一環でした。

家族間のルールや規律は、家族全員がしっかりと覚えていました。皆自由な意志が尊重され、去りたい者、一員になりたい者、すべて受け入れられました。お互いを傷つけさえしなければ、自由でした。

働いて獲たものは、皆で分け合い4等分されました。最初の1/4は、もう自分で働く事のできない年長者グループに与えられます。年長者という肩書きは自分で判断します。人によっては、同じ年でもまだせっせと働いている者もいれば、隠居している者もいました。自分の心と体の事は本人が一番良く知っているのです、いつ引退するかは本人の判断です。他の1/2を他の家族に与え、最後の1/4を自分の一家に持って帰ります。

私たちの家族は、アリ'イではありませんでした。アリ'イ以上の格であると考えます。この島に人が住みはじめた時からここにいる聖なる血筋です。

一年に一度あるマカヒキの季節には、家族同士の会合が開かれます。生きている家族が全員集合します。コミュニティーから出ていった家族もここで再会します。思い出を語り、懐かしい人たちの再会、新しいロマンスも生まれます。まだ会った事のない親戚に出会ったり、恋に落ちる若者も少なくありません。

会合では、それぞれの家族が自分の家系の歴史を語ります。私の家族は、祖父カイヤケアの妻達、子供達、孫、曾孫全員が出席しました。全員がこうして揃うのは、一年にこの一回だけです。あとは、それぞれの家族で仕事に従事し、忙しく過ごしていますので、なかなかお互い会える機会はありません。この祝祭では、古いチャントが唄われ、モロカ'イ・オ・ヒナの歴史、伝統が語られました。たくさんの涙と笑いがあり、他界した家族たちへの追悼のチャントやメレが合唱されます。

この期間だけは、一切仕事をせず、ただ祝祭の食事の用意など準備をし、あとはひたすらコンテストとゲームに明け暮れます。各コンテストやゲームに最も適した人物を家族の中から選択します。そして家族の代表として競い合います。ほとんどは、スポーツでしたが、他にも技術や武道競うコンテストもありました。ゲームが始まると一家総出で代表者を応援しました。奇声を発し、相手が反則行為をした時には、相手の名前を叫び、ついでに先祖の名前も明らかにしました（これについてはいつも後で叱られます）。人間ですからこういう事もありました。良い時、悪い時、楽しい時、苦しい時、家族ですから色々な事があります。それがあって完全なる状態です。私達には'オハナがありました。

Hakahaka Leo

O Ha'i 'Ōuli

ハカハカレオ
オハ'イ'オーウリ

オーメン・予兆を読む人・予言者

ハワイの島々には、時のはじまり以来、予兆等を読む予言者がいました。

アリ'イ専属の幹部の中にも必ず予言者が含まれていました。チーフは、予言者を常に側近として置き相談し、戦いについて、自分の健康、未来、敵の将来についての予言を聞いていました。予言者によっては、チーフが聞きたがる答えだけを話す('ウプ)者もいて、チーフは、それに従って行動をしました。

アリ'イには、そうでない予言者もついていた。嘘をつかず、見た事だけを正直に伝える者です。正直に真実を伝えた為に死刑にされた予言者もいました。アリ'イ以前からいた古代ハワイ人の中には、男女共々、予兆を理解したり予言のできる才能を持った者が多くいました。彼らは特別な存在でした。彼らはとても古い魂で人々を助ける為に肉体に戻って来たと思われていました。直系の家族の中に居る場合、'オハナ ラハ（遠い親戚）に居る場合もありました。彼らは"カウラ"と

呼ばれていました。予言者という意味です。直訳すると「純粋なエネルギー」- “光の存在”、という意味です。カウラたちは、先生でもありました。カウラのハラウ（教室）やヘイアウ（聖地）は、必ず白いティーツリー・リーフとククイの木で囲まれていました。これがカウラのいる場所である標でした。そこは逃れの地として安全な場所で、天候が荒れている時、人生が荒れている時に行く駆け込み寺のような場所でした。

カウラたちは、目立つ事を好みませんでした。彼らの助けを必要としているなら、どこにいるか探し当てるしかありませんでした。辿りつけば、アリイであろうと一般人であろうと誰でも歓迎して迎えてくれます。

この光の人たちは、質問をしたり、森や海からサインを読む為に何かを持って来るように要求する事があります。カウラによっては、物は必要なく質問だけで答えを見いだす者もいましたし、すごいカウラは質問する以前に答えを知っていました。それぞれにやり方は異なりました。目を閉じて、仮死状態のようで息もしていないようにも見えました。霊の世界に行ったり、未来や過去に行ったり、'アウマクアから話しを聞く事もあるそうです。

性別は問わず、その人の能力、威力、パワーが重要でした。私の先生であったマカ ヴェリヴェリも素晴らしい予言者であり、予兆能力を持っていましたが、私たちの親族の中で最もすごい能力を保持していたのは、マウイ島のハナに住んでいたキハ・ヴァヒネでした。私が生まれた時、聖名として、彼女の名を受け継ぎました。彼女のマナで祝福され受け継ぐ者と思われていました。私は、マカ ヴェリヴェリから、予兆の見方など聖名をもらった者としての教育を受けました。

モロカイ島では、カウラという呼び名もカフナという呼び名もあまり耳にする事はありませんでした。それはもしかしたら、ハワイ ネイ(ハワイの事)の中で最も素晴らしい能力を持った者達がこの島に集まっていたからかもしれません。プゴ'オのカニカウラは偉大でした。カイ-アケアも素晴らしい力を持ち、その娘のマカ ヴェリヴェリもまた有名でした。その他にも大勢いました。

私が 13 歳の時、忘れがたい出来事が年長者の一人に起きました。その時の予言者が誰だったかはよく覚えていませんが、その時の出来事は鮮明に覚えています。私の大叔父が腰の骨を折ってしまい、なかなか治りませんでした。骨接ぎの先生が治療にあたりましたが、骨が固定されません。年長者たちと彼を愛するものは皆、先祖に祈りを贈りました。祭壇にも供え物を捧げました。薬草のドクターにも来てもらい痛みを抑えてもらいましたが、一向によくなる兆しがありませんでした。

ある朝、叔父が大叔父を'オヒアの東にあるククイ・ヘイアウに連れて行きたいと言い出しました。農作の為にヘイアウでしたが、そこにすごいヒーラーがいるという噂を聞きつけたのです。かなりの距離がありましたが、叔父は皆に大変愛されていたので、皆で彼の願いを聞き入れる事にしました。

長老が四人の若く力のある男たちを選びました。プ'ウオラ二大叔父さんは担がれ、その後ろにクプナたちが付いて歩きました。食料と休む時のマットも持って行きました。このヒーラーは自

分たちの親族ではなく、本当に会ってくれるか、治してくれるかはわかりません。歩きながら長老たちは祈りました。それまでは、家族は家族の中で問題を解決してきましたので、この事態は非常にめずらしい事で、みんなとても気がかりでした。残された私たちは、できるだけ心配しないようにし、先祖たちが叔父たちを身守ってくれる事を信頼しました。

ブ'ウオラ二大叔父さんは、私たちのクプナ・グループの一員でした。かなりの年長者でしたが、頭の回転が早く目が輝いていました。大叔父は、怪我をしてからは、自分が治るまでクプナの代理人を立てるように他のクプナたちに伝えていました。そしてペ'エルア（私の父）が選ばれました。ですので、父もクプナたちと一緒にククイ・ヘイアウに同行して行きました。そして、これから話すそこで起きた詳細は戻って来た父から聞いた話です。

ヘイアウへの道のりは、とても穏やかでした。誰にも問い正されず、犬に吠えられる事もなく、空は真っ青で虹が歩く前を照らしてくれていました。ヘイアウに向かって行くと一人の男性が現れました。20代中頃の凛々しい若者でした。その男は、彼らが誰か、何の為に来たのか既に知っていました。彼は、「こんな長い道のりを来たのは無駄だった。大叔父さんはもう治りはじめています。大叔父さんは長生きをする。」と言いました。それから、従姉妹のマヌに向かって「家を整理しておきなさい。あなたの人生はもう長くありません。」と言いました。こんな若者が本当に叔父が探していたヒーラーなのか、皆疑いました。もっと年長の賢者を想像していたからです。彼は、笑って食事と休憩をさせる為に皆をヘイアウに招き入れました。

一行は、ヘイアウで一夜を過ごしました。若者とその仲間が食事を持ってきてくれたり、要望を聞いてくれました。翌朝、また帰宅の旅がはじまりました。大叔父は自分が長生きする事を聞き、すっかり心が平和になり陽気になりました。彼は、まだ先祖の仲間入りをするつもりはありませんでした。

まだ死にたくないと思っていたり、突然の事故や戦争で亡くなった人たちは、この世に留まり、悪さをしでかす者もいました。その理由から、私たちは自分の'オハナにそのような事がないように、他界する時は平和な心で進んでほしいと願っていました。上の世界では、'アウマクアが待っていて歓迎してくれます。次の世界に楽に進めるように手助けしてくれます。この世では、肉体を持った私たちが他界するまで家族が平和な心でいられる様に努力します。大叔父のように、頑としてもまだこの世を離れたくないと思っている場合には、何としても治るように皆で力を合わせます。

私たちは、幼い頃よりすべては偶然ではなく、理由があって起っていると教わっていました。その時には理由がわからず、不幸に見える事でもハッピーに過ごすように言われました。その事が起きなければ、学びもなかった事になるからです。

ブ'ウオラ二大叔父さんについては、杖を使うようにはなったけれども、その後数年生きました。最後は寝たまま笑顔で他界して行きました。

私のハナイ（養子先）の母と従姉妹たちは、大叔父が死ぬまで足が不自由になったのは、マヌに死期が近づいている事を理解してもらったと言いました。マヌは、足の不自由な大叔父を運んだ若者の一人で死を予言された者でした。

誰も従兄弟マヌについて予言者の言った事を話す者はいませんでした。誰も忘れてはいませんでした。本人には大変に重いものであったでしょう。彼はよく一人で森に行ったり、神々や先祖と交信しやすい夜にヘイアウを訪れるようになりました。マヌはまだ若く、妻とその間に生まれた子供が三人いました。一人は生まれたばかりで、女の子はようやく歩き出したばかりで、長男は3歳でした。マヌはとても良い人でした。漁師としても、網の作り手としても、鳥猟にしても良い腕前で、良い父親でした。頭の回転も早く、親切で思いやりのある人でした。既に将来クプナの仲間入りをする候補に上がっていました。

ある日、マヌは海に魚網を投げている時に息子が自分に近づこうとしているのに気がつきました。息子が溺れないように急いで網を離し息子の方に行こうとしました。すると足が珊瑚の間に引っかかり海の中に落ちてしまい、息子と共に先祖のもとに召されのたでした。

私たち家族の間ではお互いに色々な事柄が知られていました。そして、知っていたからこそ助け合えたのです。マヌの件に関しては、家族以外の人から彼の死を予言されました。滅多に無い事ですから、きっと私の記憶にいつまでも強く残っているのでしょう。所詮人類みな家族ですね。

私の先生であり、養子先の母であったマカ ヴェリヴェリは、未来を見る事にたけていました。彼女は、ハラウで未来や過去の見方を教えてくれました。肉体を離れ、答えを見つける方法を教えてくれました。これは何年もの長い年月トレーニングする必要がありました。

幼少の頃から私は他の子たちと何かが違うという事に気づいていました。私の衣服は誰も触ってはいけないと言われていました。自分に聖名がついていて、強いマナがあると知らされていましたが、それがどういう事なのか理解していませんでした。聖名は、クプナたちがその名が本当に正しい名前かどうか確実になった時にはじめて本人に伝えられます。時にはずっと大きくなってから、初めて知らされる事もありました。名前をつけたクプナが他界して、初めて明かされる事もありました。聖名は、聖なるもので、軽卒に扱ってはならないものでした。生きている人間の中で同じ名前をもらえる者はいません。その子に限った神聖な名前でした。子供に生きている他の人の聖名をつけるという事は子供にも両親にも災いを招く事になるのです。聖名でない他の親戚（愛され尊敬された者）の名前をつける事はよくありました。その場合には、オピオ（ジュニアー）を後に付けます。私の家族では、カイリが付く名前の方がたくさんいました。その後それぞれ違う名前がつきます。私の聖名は、完全に私一人だけに与えられた名前でしたが、正しい時が来るまでそれは知らされませんでした。

他界した親族の名前をとる理由は二つありました。一つは、その先祖が生まれ変わり、その子供の体に再び宿ってきたと考えられた時、もう一つはその人が大変に優れた性質を持っていたので、その人のような強さと智慧を授かるようにという願いからでした。後者の場合、時には後にな

って名前を変えなければいけなくなる事もありました。名前が重すぎて（パワフル過ぎて）、その子の負担になっていると感じられた時です。先祖の名をとる時には、カ マカ オの後にその先祖の名前をつけ（〇〇〇の目）という表現をよく使いました。これは実際には、先祖を利用しているような大変失礼な行為となる事もあります。時には、問題なくその名のまま一生過ごす事もできますが、時には神々のお怒りを受けて、強制的に名前を変えざるおえない状況になる事もありました。

キリスト教徒から見ると、子供の名前がそんなに重要なのか？と思われるかもしれませんが、実際に西洋でも子供の名前は聖書に登場する聖人たちの名前の中から慎重に選んで決めているのではないのでしょうか？その聖人のマナを自分の子供が受け継ぐようにと願って、その名をつけるのではないのでしょうか？

私の聖名は長い事誰にも知らされませんでした。クプナたちが、本当にこの子がそうなのか？名を汚してしまうのではないかと恐れていたのです。そして、ようやく私が女性になった12歳の時、その名は正式に表明されました。聖名を授かる年齢としては、とても若い方だったようです。

ハラウの仲間たちは、私が聖名を授かる晴れの日の為にククイ・ナッツを集め、丁寧に磨き、サイズを整え、オイルで更に輝かせた素敵なレイを作ってくれました。長さも私の首にぴったりでした。私の先生であり母であったマカ ヴェリヴェリは、ククイの葉と花で編んだ頭用のレイを下さいました。私は、正式に“ライト キャリヤー(光の使者)”となったのです。これから真剣な学びが始まる事になります。家族のチャントを覚えてなくてはなりません。今まで、ずっと一生懸命に学んできました。謙虚に、よく耳を澄ませ、軽卒な質問をしないよう慎重に、些細な家事でも敏速に働き、粘り強く、よく観察するように努めました。私はこれから真の生徒となり、秘技を教わる事になるのです。とても興奮しました。

レイが渡された後、私は手をとられマカ ヴェリヴェリがいつも座り、祈り、教え、考える時に使う祭壇の上に誘導され、腰を降ろしました。仲間の生徒たちと家族に向かって座っています。そして、マカ ヴェリヴェリが私の耳元で私の聖名を囁き、口の中と頭のとっぺんに息を吹きかけました。ここで感情をあらわにするのは適切な態度ではありませんでした。間違えて聞いてしまったのかと耳を疑いました。頭が混乱してしまいました。彼女が囁いた名前は、キハ ヴァヒネ ルル オ ナ モク（島々を守る聖女）でした。そんなすごい名前にどうやって立ち向かえば良いのでしょうか？涙が出そうになりましたが、どこからか穏やかな心が芽生えはじめ、無事に問題なく命名式を終える事ができました。

私の家族の名前はとてもいじわるで醜いものばかりでした。父方の伝統として、そうしていたのです。父の他の兄妹は子供にひどい名前をつけませんでした。父はそうしたのです。例えば、ラハパ（半日＝意気地がない、怠け者）、カ'イリ'メ'エアウ（かゆい皮膚）、そして一番多かったのがカイリ'オヘ（駒使い）でした。一番かわいそうな名前は、カ マ'イ ヴァヒネ（毎月赤日のあつ

た女) でした。年長者たちは、そのような名前をつける事で、この世に残留している霊たちが憑依するに値しない存在だと認識して、ほっておいてくれると思ったからです。外国人に自分たちの名前の意味を教えた時の表情は本当に一見の価値がありました。お化けでも見るかのように彼らはすぐに立ち去ったのです。

命名式が終わった後は、ハラウの仲間たち、家族一同と先生が参加して会食が開かれました。とても大切な記念すべき日でしたが、年長者たちは、その他いろいろな話題でにぎわいました。

時代は刻々と変化していました。たくさんの外国人がハワイに移住してきました。ラハイナなどは、本当にたくさんの外国人がいて、どんどん増えていきました。カメハメハ1世(リホリホ)は、動かしやすい人物でした。家族もそれを承知していましたが、感情の穏やかなジョークの下手な人間でした。お酒に弱く、酒を渡されるとなんでも承知してしまうのです。その後1世の弟、カメハメハ3世(カウイケアオウリ)が王に君臨します。ポキトリリハに厳しくしつけられ、とても巧みな人物に育て上げられていました。頭のいい人でした。彼は読み書きを“長い首(宣教師)”から学び、先祖からのマナを受け継いでいました。なのに、なぜ彼は自分の民に背くような行動をとったのか?なぜ高い税金を要求したのか?なぜ一軒一軒調べて、豚、犬を何匹飼っているか、何個の生け簀を所有して、庭の広さ等もこそこそと調べていたのか?

ある家族の一員が聞いた話だと、お金はすべてゲリット ジュッドの懐に入っていくという事でした。ラハイナでは、ジュッドの事をジュッド王と呼んでいたそう。

家族はこの問題について皆で朝まで話し合いました。私が何年もかけて学んで来た事が始まろうとしていました。予兆は既にあり、廻りはどんどんと変化していました。マカ ヴェリヴェリが予言していた事、彼らが私たちを引き倒して行く事は、皆口にはしませんでした。忘れてもいせませんでした。

その時代の事を後になって振り返ってみると、その時の状況を理解するのは容易でした。私たちの教え、愛と光の教えは、私たちを弱者にしていたのです。外国人をアロハで歓迎しました。あれがほしい、これがほしいと頼まれると一生懸命にそれを用意し、喜ばせようとしてしました。人間が土地や海を所有できる事を知りませんでした。土地や海は皆で活用する為にあるものでした。アリイたちは、自分の都合の良いように分配して行き、また次のチーフたちがこれをも変えていったのです。ハワイアンは権利は奪われました。西洋人は、自分たちの山道を歩いていて、ハワイアンはいる山道からの見解を理解しようとはしませんでした。そして、我々も彼らの山道からの見解は理解できなかったのです。

モロカ'イ島の民は、“光”を信じていました。私たちは、自分のボールの中の光がいつもいっぱいである事に努めました。そして、私たちの道を通る者には、その光で灯してあげようとしてしました。我々の民は、数百年前にここを訪れた聖人に「目覚めた人」がいると言われました。その聖人の事を人々はまるで彼の後ろに菩光が差しているようだと言っていました。アリイたちは、

これを真似て、背中が燃えているような絵柄のカパを作りました。宣教師が到来した時にイエスの絵を見せられました。彼もまた後ろに菩光が差していました。キリスト教の聖書は、隣人を助け合う愛に満ちあふれた内容でした。私たちは、その素晴らしい聖書に傾倒し、すぐにキリスト教信者になりました。私は何度もキリスト教に改宗しましたが、同時にペア（過去に閉じ込められた状態）になっている事に気づきました。ハラウに通い続け、何時間も瞑想をしました。自分の光のボールを光で満たす事は間違っていない事だけははっきりとわかりました。ただ、西洋人がどうして私たちの側から山の景観を見ようとしないのかがわかりませんでした。ハラウの教室では、よく学び、質問を控え心にとどめ、よく観察し、よく耳を澄ませました。他の生徒たちも同じでした。西洋人は、言った事とやっている事が違っている事に気づきました。これは彼らの“石”ですので、ほっておくしかありませんでした。私は心の中で泣いている事が多く、いつも恐れを感じていました。西洋人の中には、私たちに愛について教え、愛を交わすのは一人の夫だけにしなくてはいけないと言いながら、自分は妻でない私の従姉妹と寝ている人もいました。

この新しいルール、新しい法律、新しい教え、新しい人々が私たちを破壊していきました。彼らの発想は理解できませんでした。私は、心ある人たちは助けようと努力していましたが、西洋人には近づかないようになりました。家族からも段々と離れ、一人になり常に沸き上がる恐怖感から自分をなだめようと必死でした。「強くならなくては！私が頑張らなくてはハワイはダメになってしまう」と思いました。

家族の教えを学ぶ一年目、私は真剣に身を捧げました。チャントを覚える事に従事していました。すべてにチャントがありました：一日のはじまりのチャント、一日の終わりのチャント、夜にしか唄わないチャント、日中にのみ唄うチャント。この時期、私はなぜ早く正確に覚えるトレーニングを受けて来たのかがわかってきました。

母方の家系のチャントは、祖父カイ-アケアの家系のチャントに比べると大変にやさしく感じました。マウイ島から来た家系のチャントは、先祖が引き継いで来た規律、それぞれが何歳で他界したか、個々の特性を細々と語り、妻たちについても同じく語り、妻に他にも夫がいた場合には、その夫の家系についても語るというものでした。これは簡単な方でした。アリイ到来以前のポ'エアオ ヒヴアのチャントを覚えるのは断然難しかったです。ハラウの仲間の中には、数年かけてまだ覚えている最中という生徒もいました。

数ヶ月後には、チャントの夢を見るまでになっていました。まさに睡眠学習でした。その頃、私たちはサイン（オーメン）とその意味について学んでいました。教室で習うすべての事は繋がっていました - チャントも授業も瞑想も。長年の完全服従、注意をはらう、細かい事も聞き逃さない、無駄なおしゃべりをしない等の校則は、ようやく花を咲かせ実りはじめたのです。

授業は本当に刺激的でした。習う事がたくさんありました。一年目が終わりに近づいて来た頃、生徒たちは何か落ち着かない感覚に苛められました。クム（先生）は、祭壇の上で幾夜共なく瞑想に入っていました。先生の中の緊迫した感情が私たちにも伝わってきました。先生は、私たち

に「授業ができる時間は限れてきましたが、まだたくさんのお話を教えなくてはなりません」と言いました。

新しいチャントや教えの学びは続きました。それと同時にヒーリングの方法や必要な場合に
応じて活用するホ'オポ'オポ (正す方法) の学びがはじまりました。信念から来るヒーリングにつ
いて、患者の症状の見方とそれに伴う薬草学について学びました。山や海辺に出かけての授業でし
た。生徒たちは皆これを楽しみにしていました。野外授業への道のりでチャントの練習をしました。
時には、先生が瞑想している間、生徒だけで海辺や山の頂上のある場所まで行くように言われ、そ
こには先輩の年長者が待ち受けていて授業が行われる事も何回かありました。不可能な事はないと
信じていました。色々なサプライズが待ち受けていました。今となつては、私も同じ事を子供たち
にしてあげられたら良かったなと思いますが、それは成されるべき事ではなかったのです。

授業が進行するにつれ、更に家族の歴史と先祖について学ばされました。また、私たちが既
に自然と理解していた事をきちんと学び直しました。これは“オハナの智慧”と呼びます。これは、
私たちが前世から持ち込んで自然に身につけている智慧です。自分を学び、なぜ今の時代を選び、
この場所を選んで生まれ変わってきたのかを認識する事です。この学びは、個々に異なったものにな
っていきます。自分が先生となり、答えを見つけるには、自分の内側に入っていかなければなりま
せませんでした。

これは自分の事を学ぶ時間でした。他人を助ける為には、まず自分の弱点や長所を理解する
必要があります。セルフヒーリングの時間でした。自分の中のバランスを取る事が大切でした。
智慧が身につくにつれ、自分の力も強くなってきます。パワーは良きにも悪きにも活用で
きるのです。誘惑はたくさんあり、自分は人の為をやっているのだと自分をまやかす、実は自分の
栄光の為にやっている事に気づかなくなる事もあるのです。

また数年の歳月が過ぎ、チャントと古代からの先祖についての授業は続いていきました。と
ても意義ある内容で、話を聞くのは本当に楽しかったです。古代の人々の話を知れば知る程、チャ
ントの中で登場する人物が蘇って来るようでした。もはや唄の中の名前だけではなくていきま
す。長老たちがなぜ他界しスピリットとなった家族の事をよく話すかがわかってきました。私たち
と本当によく似ている存在であるという事もわかってきました。お気に入りの先祖ができ、話かけ
ると、答えが戻ってくる事もあり、私の感情を感じてくれている感覚もありました。心の目で多く
の先祖を見る事ができるようになりました。彼らがなぜある事をしたのか、その時の気持ちも理解
できました。私は先祖に愛を感じました。彼らは、食事をするように、水を飲むように、私の人生
の、生活の一部となっていました。

ハラウにおける最後の一年は、今まで学んだ事の復習でした。私の世界は、想像していた以
上に大きく広がりました。体についている目ではなく、心で物事を見るようになりました。物事を
違う視点から見る事ができるようになりました。得た理解と知識は、まだまだそれから深いものへ
と成長していきます。その年は廻りの外の世界で大きな変化の年となりました。他の島々からの親

戚から色々なニュースが入ってきました。私の姉妹である二人が結婚した事、親族の一部がラハイナ（マウイ島）とホノルル（オアフ島）に引っ越した事、カウイ ケ ア'オ ウリ（カメハメハ3世）はまだ王の座にいましたが、実際には白人が政府を仕切っていました。家族の中で都会（ホノルル等）に出かけ戻ってきた者たち、水平たちの態度等、町の様子に対して皆揃って頭を降りました。いったいどうなってしまったんだ？何が起きてしまったのか？町の様子を見てショックだった事と同時にその変貌は信じがたいものだと言っていました。

私にはどうする事もできない事だったので、皆が話している場から去る事にしました。ひたすら、教え、チャントの復習に励みました。自分の成長にフォーカスする事にしました。

先生は夢についても教えてくれました。夢は、自分に真実を伝える手段であると。夢はとても大事で注意をはらうべきものですが、その智慧は忘れられがちです。夢とは自分の中のスピリットの部分が体に話かけて来る事なのです。メッセージは大概とてもシンプルで的をつけています。

夢の中の旅は、この地球上における人生の旅の一環です。歩いたり、馬やろばに乗って旅しているかもしれません。色々な登場人物がいますが、大概の場合、それはすべて自分の事です。あなたが尊敬している人が出て来たら、それは自分の中にある良い性質を教えてくれています。あなたがあまり好きでない人、あまり信頼しない人が登場した場合、それは自分の悪い部分を教えてくれているのです。限られたスペース、家や小さい空間の中に居る夢を見た時は、自分の体について教えてくれています。夢の中での詳細、修復が必要な場所などがあるか注意深く観察する必要があります。夢は、後の人生のヒントをくれるロードマップのようなものです。

夢は翌朝から活用できる学びをくれたり、問題がある時には、それを夜の寝床に持って眠る事で解決手段が出て来る可能性もあります。忘れていた大切な事、歌、チャントを思い出させてくれたりもします。とても便利なものです。

空を飛ぶ夢は、とてもスピリチャルな夢です。こういった夢はこの地球上の枠を超えた夢です。永遠の時空に行くのです。一つの世と次の世の間に行くスピリットのいる場所に回帰する夢です。スピリット・ファミリーのいる場所です。

ハワイの人々が伝統に背を向けて、色々な信仰に走り始めると、古いやり方を愛し、光のボールを保持する事を重んじる私たちは、目をつけられるようになりました。親族、家族でさえ、こそこそと私たちの様子を伺いに来たり、うわさし、避けられていきました。家族は最も気をつけなければいけない存在になってしまったのです。土地が分配されるようになってから、私たちハワイアンのマインドも心も分配されてしまったのです。審判の時が訪れました。

Ka Kahuna Kahua Haua

カ カフナ カフア ハウア
カフナ（達人）のシステム

カフナの種類

Kauka ha'īha'I iwi	カウカ ハイハイ イヴィ	骨接ぎ
Lomi lomi	ロミ ロミ	マッサージの達人
La'au lapa'au	ラ'アウ ラパ'アウ	薬草のドクター
Niho	ニホ	歯医者
Kaukukulolo	カウカウ カロロ	入れ墨の達人彫士
Wehe wehe	ヴェヘ ヴェヘ	夢の解釈士
Imu (or umu)	イム (ウム)	オーブンのキーパー (料理の達人)
Po'o	ポ'オ	高位神官
Kilo kilo	キロ キロ	空やオーメンを読む達人
Kalai	カライ	彫り物の達人
Ho'o o ulu'ai	ホ'オ オ ウル'アイ	農業の達人
Nani i na 'ouli	ナニ イ ナ 'オウリ	性格リーディングをする者
A'o	ア'オ	魔術・妖術の先生
Kuehu	クエフ	悪霊祓いをする者
Kaula	カウラ	予言者
'Ana'ana Ho'o unauna, kuni	'アナ'アナ ホ'オ ウナウナ、 クニ	ブラック・マジックを行う者。(一般にはこ れだけがカフナだと思われていた)
Ninau 'uhane	ニナウ 'ウハネ	霊と対話する者
Haha	ハハ	体の状態を感知し病状を知らせる者
Kumu hula	クム フラ	フラの学校を任されている者
Ho'o hanau keiki	ホ'オ ハナウ ケイキ	産婆
Ho'o hapai keiki	ホ'オ ハパイ ケイキ	助産婦、子供のいる母親のケアをする人
Mamake kaua	ママケ カウア	戦争を計画し、リードする者

Pa'ao'ao	パ'アオ'アオ	ハハの内、手で感知し子供の病状を診断する
La'au kahea	ラ'アウ カヘア	信仰的ヒーリングの達人
Haku mele ula	ハク メレ ウラ	チャントや音楽の作詩作曲家
Kalai wa'a	カライ ヴァ'ア	カヌー作りの達人
'Ea	'エア	死人を生き返らせる者
'O'o	'オ'オ	下血させ病を治す者
Ho'okele	ホ'オケレ	航海のナビゲーター
Wanana ikeauokamanawa	ヴァナナ イケアウオカマナヴァ	天候のサイン(予兆)を読む者
Kela moku	ケラ モク	海の達人
Lawai'amanu	ラヴァイ'アマヌ	鳥猟の達人
Ka'a kaua	カ'ア カウア	戦略担当者
Papa po'o	パパ ポ'オ	軍隊の隊長
Lawelawe iwi	ラヴェラヴェ イヴィ	死人の骨を管理する者
Lawai'a kolau	ラヴァイ'ア コラウ	網漁の達人
'Upena hana	'ウペナ ハナ	漁用の網を作る達人
Kukei'i wana'ao	クゲイ ヴァナ'アオ	物語の語りの達人
Hale kukulu	ハレ ククル	建築の達人
Hui	フイ	チーフの幹部会の役員で式典や行事担当官
I'e kuku ho'ooki	イ'エ クク ホ'オオキ	タパ(生地)作りの達人
Ho'a 'ahu	ホ'ア 'アフ	チーフと幹部に衣服を調達する者

カフナという言葉は私たちの中ではあまり頻繁に使われる事はありませんでした。カフナというタイトルがついているという事は、その人が何かの分野で最高のエキスパートであるという意味を現します。カフナの元で長年修行した生徒であっても、カフナと自分を名乗る事はしません。師匠であったカフナがこの世を去る前に自分の後継者が誰になるかを伝えます。生徒の中で特にその能力と頭の回転の早さを買われた場合には、その生徒は寝床でカフナの横に呼ばれ、口の中に息を吹きかけられます。そして修行中には教えられなかった最後の智慧を教わる事になります。カフナから息を吹きかけられた者は、最も優秀であり、後継者と認められ秘技のキーパーとしての任務を遂行して行く事になります。

私たちの中でカフナは現代崇められているような存在ではありませんでした。一つあるいはそれ以上の分野においてのエキスパートであれば、カフナだったのです。40種類以上の工芸のカフナがいて、治療師としてのカフナは14種類程でした。更に、チーフの幹部として政治専門のカフナもいました。家族の中の年長者は皆それぞれ何かのエキスパートでしたので、私たちにとっては、ただ祖父、祖母、叔父、叔母という意識の方が強かったのです。

カヌーを作る男たちは、最も素晴らしい技術者という意味で最も強いマナの持ち主と人々に評価されていました。カヌー作りのカフナと呼ばれるまで修行した者はほんの一にぎりでした。それ以外には、マット編み、ココナッツの葉で編むクラフト、魚網作り、やす作り、カパ染め、カパ作り等の日用必需品において普通以上の作成能力を持ち、エキスパートになった時にはカフナと呼ばれたのです。

物作りは生活の基本でした。私たち全員、何種類かの日用品の作り方を学びました。当時はお店というものはありませんでしたので、必要な物は自分たちで作ったのです。

カフナという言葉は、1800年代中頃からハワイ語の語意を理解しない外国人に誤解されて使用されてきました。1900年代には、その言葉は“恐れるもの”になっていきました。世の中には、必ずある状況を悪用して儲けようとする者がいます。ハワイアンの中にも、そういう人たちがいました。彼らは、ある薬草を愛の魔薬として効果があるとして売ったり、あるいは問題を解決する祈りや薬草だと言って売ったり、嫌いな人、敵対心を持つ相手に痛みを与えるもの等、あらゆるものを商売に利用しました。

当時すでに多くの西洋人がハワイに住んでいました。オアフ島、マウイ島では、西洋人は、片手に聖書を持ちながら、片手ではこの魔薬を買いに走っていたのです。長老たちは、首をふってこの状況を嘆いていました。薬草を売ったハワイアンたちは、たくさんお金を儲けたのです。しかし彼らのマナは失われました。遊びと利益の為に、自分の光のボールの中の光を失ったのです。

カフナは他にもいました。ヘイアウに住んでいる神官です。偉大なるパワーを持ち、未来を語り、死者を蘇らせ、触って人を癒す事もできました。彼らの事は、seer(見える人)あるいはカウラと呼びました。彼らは一人あるいは生徒と暮らし、一目につかない存在でした。今日彼らは神官と呼ばれる存在でしょう。お金は一切とりませんでした。今日でも真の光を持つものは、お金をとるでしょうか？お金をとる人は注意した方がいいです。光を持つものは、どんな人でも助けます。そして、また助けてくれた人が助けを必要としている時にお返しをします。ヘイアウを訪れる時は食べ物をお供えとして持っていく習慣はありましたが、カフナにギフトを持っていく必要はありませんでした。彼は農作業をし魚を釣り、他の人たちと同じように生活していました。生徒たちは、日々の仕事を手伝い、謙虚に生活する事を学びました。彼らの修行は人生におけるすべてを学ぶ事でした。

アリイと共にハワイに渡来したカフナもいました。彼らは戦略専門家として、また生け贄などを指示する人たちで私たちの社会に大きな波乱をもたらしました。この最初が1250年頃に渡来したパアオでした。彼らはよそ者で、その暗黒の力がモロカイ島に侵入しないように、私たちは力を合わせてそれを阻止しました。それ以来いつしかモロカイ島はマナの力の強い場所として恐れられるようになっていきます。

私たちのオハナでは、家族のルールを管理するものが偉大な力を持っているという仕来りでした。雨が必要な時には雨を降らせ、十分に足りた時には止める事もできました。これは子供の遊び事のようなもので、単純に集中してやれば、そんなに難しい事ではありませんでした。

子供たちは、天候のリーディングや星のリーディングのトレーニングに何時間も費やし、意志力のコンテストをしました。雲を大きくしたり、小さくしたり、雨を降らしたり、止ませたりの練習でした。一日中子供たちの意志力によって天候が忙しく変化していく日もありました。

その他にも集中力を競い合いました。物を動かす、消す、また見つける、そして目の前に引き出す。現代の世の中で、これらの事は不可能とされていますが、私たちが子供の頃はこのような事を日々練習していました。

人生そのものが学校でした。現代でも人生は学びです。生きている限り人間は学び続けます。ハワイの道は、学ぶ為にこの世に生まれた事を信じ、この大地を歩いている限り学びは続くというものです。西洋人に人生について教えてもらう為に、茶碗と魚一匹を持ってぞろぞろと建物を訪れる必要などなかったのです。私たちの先生は、家族の中にいました。家族の長老以上に私たちに必要な事をわかっている人が他にいるでしょうか？長老たちは、子供たちをよく観察し、各々の子供の才能を見分けます。そして、その能力に長けている適当な叔父や叔母の所に送り込みます。多くの子供は、生まれてまもなく、あるいは1、2歳から預けられます。その頃までに才能は明かされるのです。

生まれる時に何かサインがあり、その子の才能が識別され、適切な先生の手で育てられます。もう少し大きくなってから、預けられる場合もあります。クプナ（長老）たちの判断に狂いはありません。生まれた時、既に能力が明かされている子供は、たいていはヒーラーとして、あるいは予兆やサインを見る能力、あるいはナビゲーターとしての能力がある場合でした。最も遅くに能力が明かされる子供は、たいてい家族の歴史のチャントを学ぶ事になります。この場合、最初の頃は何か違う事を学ばせておいて、能力が開花されてくるとチャントを学ぶ事が追加されるようになっていました。家族の歴史を学ぶ事は大変重要であるとされていました。優れた記憶力と細心の注意力と長時間座っている事のできる忍耐力、集中力が要求されます。

私が生まれる前の話ですが、家族の歴史を語るチャンターになるべく運命の子が死んでしまった事があったそうです。この時長老たちは代役として二人の子供を選びました。男の子一人と女の子一人です。その後、これは一つの仕来りとなっていきました。

家族の歴史を語るチャンターとして選ばれた子供は、'アハ'アイナ ホ'オリロ（任命を受けた子供を紹介する家族ミーティング）において紹介されます。その運命の子であると断定されるまで、長老たちはその子をしばらく観察します。一人の長老にサインが示された時、長老たちは話し合い、そのサインが正しいものであったと全員が了解した時に'アハ'アイナ ホ'オリロが開催される事になります。そこには家族が全員集合します。運命の子（複数の場合もある）は、ヘイアウに連れられ聖化式が成されます。この儀式の際、この子供の教育者が子供の口と頭のとっぺんに息を吹きかけ、「ク'アウハウ'アウマクア（先祖代々の守護霊）から贈られるマナが私を通してこの子供に受け継がれ、導き下さいますように」と言います。その日から、その子供の修練の日々が始まります。

1840年までは、モロカ'イ島の子供たちは全員、ヘイアウでの聖化儀式が行われてから修練が始まりました。それ以降は、どんどん簡略され式は先生の家で行われるようになっていきます。これはヘイアウに行った事が廻りに知られると恥ずかしいという思いがハワイの人々の中に広がって行っ

たからです。20世紀に入ると、年配者以外はヘイアウに行こうとする者がいなくなって行きました。若者たちは、ハ'オレ（白人）の生活スタイルに順応して行くようになります。両親たちは、ハワイの古い習慣を避ける子供たちを見て、とても残念に思いました。モロカ'イ島では、宣教師が私たちを変えたというよりは、若者が自ら変わっていったという方が正しいでしょう。

多くの人たちが他の島に旅したり、ラハイナやホノルルへと移住していきました。モロカ'イ島は古くさい所だと思って去って行ったのです。家族が代々信じて来た信仰や生活習慣を馬鹿にしました。多くの人たちは、家族の伝統行事に参加する事を拒み、特にヘイアウに行くのを嫌がりました。長老たちは、自分たちの智慧の行き場を失いました。若者は年長者への尊敬の念を持たなくなりました。ですから私はできるだけ子供たちを都会に行かせない様に努めました。都会は邪悪な所で何も良いものを運んで来ないと感じたからです。

私の島では、アリ'イが渡来する依然から住んでいた家族がいて、いくつかのヘイアウが存在しました。漁の為のヘイアウは、たくさん魚を釣れるように、そして漁師の無事を守る為の聖地でした。農業の為のヘイアウは、豊作と農業をする人の無事を守る為の聖地でした。各ハラウ（教室）にも生徒たちの為のヘイアウがあり、自分の'アウマクアに特別の保護と助言をもらう練習の場として活用されました。更に、クーとヒナを祭るヘイアウがありました。私たちの親でもある、大地、空、海を祭る場所でした。

アリ'イがタヒチから渡来するまで、私たちのヘイアウの中や廻りに木像は存在しませんでした。後に彼らの影響で他の島々ではヘイアウにティキ（木像）が置かれるようになったのです。モロカ'イ島ではハラヴァにおいてカヘキリとその他のチーフたちによってティキが設置されました。私たち家族のヘイアウは古来の伝統を重んじ、ずっとそのままに守られました。古来のハワイでは、クーを父として崇め立石を用い、ヒナを母として崇め平状石を用いました。

家族の誰かが細長い滑らかな表面の石を見つけた時には、それをティーリーフで包み聖地に持ち運ばれます。このような石を見つけた時にはとても良いサインであると考えられていました。石も私たちと同じ様に生きています。石が聖地に持っていかれる事を喜んでいると感じました。今でもそう思います。

私たちはヘイアウやそこに住む人について特別な力を持っているとは考えませんでした。すべては自然のあるがままの状態であると教わってきました。すべて生命体と一つであると教わっていました。砂の粒子、一滴の水、すべてが全体の一部なのです。

すべては4で数えられていました。両手に4本の指を持っていたからだと思います。ヘイアウのレレ台にお供え物を持っていく時も4つ持っていきました。一つは我々に食物を与えてくれる大地へ、もう一つは生命の源へ、三つ目は浄化してくれる海へ、四つ目は清めてくれる火の力への贈り物でした。ヘイアウは女性禁制であったという話をよく耳にします。それはアリ'イの制度だったのかもしれませんが、私たちの家族やハラウでは皆平等に扱われていました。私は自分の霊的な

家族に大変感心がありましたので、常に祈りを捧げ、感謝のお供え物を捧げていましたが、誰もそれを批判する者はいませんでした。

私が年を取ってから、孫や曾孫から聞いた話では、古来ハワイの習慣として女性は祈ってはいけなく、男性のみが祈りを捧げ、男性の食事をする部屋やヘイアウに女性が入ったなら、その女性を殺す権利が男性にあったという話を聞きました。もしかしたらアリイの制度の中にそのようなものがあったのかもしれませんが、私たちの島にいたアリイたちはそのような規制をしていませんでした。私の祖父カイ-アケアは、たとえアリイの定めた制度であろうと自分で気にいらなければ従わない事で知られていました。

ハワイ ネイ(ハワイの島々の事をハワイアンが表現する言い方)におけるヒーリングの方法は、どの島でも同じでした。家族の'アウマクアに健康を運んでくれるように頼んだのです。家族でヒーリングを専門にする者は、病気の人がいたら誰でも助けてあげました。病を持つ者の家族と長く話しをし、家族にどんな石(ネガティブな感情)があるかを確認していきます。家族は、全員ですべての石が光のボールから取り除かれる事を祈り、更に他界し霊界にいる者でその患者に対して感情を害された者がいるならば、今許してくれるようにと祈りました。

時には、その病を通して学ぶ事がある為に起きていると伝えられる事もありました。これは今まで避けていた事と向き合う為に起きているのだと告げられます。謙虚になる事へのレッスンである場合もあります。家族で要因を認識し、皆で助け合うように努力しました。

私は、常にクーとヒナに祈りを捧げていました。彼らは私たちの最初の祖であり、常に見守ってくれている存在だから愛を返したいという思いから祈っていました。彼らに個人的な問題に対する助けを求める事はしません。何か問題があった時、また家族の誰かが病気になった時、死んだ時には、先生且つハナイの母であるマカ ヴェリヴェリに相談しました。彼女は時に、私が言い出す前からその問題について指摘します。

問題の解決が容易でない場合もあります。問題は時には自分たち家族のサークルの外から来ている場合があるからです。長老たちがそうであると判断した時には、家族全員にライレイと呼ばれるティーリーフのレイをつけるように言います。そして全員でその問題や病が来た所に戻るようにと朗唱します。「この問題あるいは病を送ってきた者に返します。それを受け入れ、我々を解放し自由にしたまえ」

何かの理由でパワフルなヒーラーを助っ人として呼ぶ事もありました。この場合すべてのサインが良いものである事を確かめる事が重要でした。彼の食事の後に頼みに行く事が望ましいです。そうしないと彼は来ない可能性があります。彼が来た時に、後ろから声をかけない事。声をかけてしまった場合、彼は引き返してしまう事があります。現代ではそれが無礼になると言いますが、当時それは縁起が悪いと考えられていました。問題を解決する時、祈りが必要な場合には、すべてにその祈りを捧げました。キリスト神の教えが到来してからは、キリストにも送り、アリイの神々に送り、自分たちの'アウマクアと先祖全員に送りました。そしてごちそうが用意され、'アウマクアに

お供えされます。「オケアカカ'オウコウ、'オカ'イ'オカマコウ」と祈りました。この意味は、「あなたがエッセンス（本質）で私たちがその身体です。」という事です。彼らはごちそうの香りを頂き、私たちはそれを食べました。そして、残りは燃やします。残りものはほとんどありませんでしたけれど。後に中国でも同じ様な風習があると知りました。世界は小さいですね。

私の家族には特別な'アウマクアがついていました。モ'オ キコという名前でカプアレイのヘイアウのそばに住んでいました。巨大なとかげの姿をしていると聞かれています。そして、私が小さい時に彼の夢を何度か見ました。でも実際にこの目で目撃した事はありません。彼に対して怖いという思いは全くないし、彼が私たちの家族である事に対しても恐れはありませんでした。実はマカヴェリヴェリがモ'オだと言う人たちもいました。彼女は確かにモ'オ（龍）だったと思います。それを疑う余地はありませんが、この話は彼女が活着している時に彼女から聞いたものでした。私も年を取ってからモ'オ キコと呼ばれる事がしばしばありました。彼らは、嫌みで言ったのだと思いますが、私にとっては侮辱ではありませんでした。私はただニコリとしました。人間はまだまだ学び足りません。山の頂上への道のりはまだ長いでしょう。

Mamawa Mau Loa Aku

マナヴァ マウ ロア アク

永遠なる時

タヒチからアリ'イたちが渡来するまでの古代ハワイでは、私たちのパワーは偉大でした。私たちのコア（木）のボールは光に満ち溢れていました。そして色々な事ができる能力を持っていました。すべての生と死に関する法律もありませんでした。法律はすべてアリ'イたちが持ち込んだものです。もしも私たちの中で法律があったと言うならば、「すべてが一つである」という事です。他人を傷つけるような事を言ったら、それは自分を傷つける事になるのです。自分の弟を殴ったなら、それは自分の両親と'アウマクアを殴る事になるので、誰も殴らない方が一番良いという教えです。

昔のハワイでは、横になって意識がどこか遠くに行くような半眠状態になる事は普通にやっていた。天候の状態を確かめたり、遠くにいる愛する人が元気にしているか透視したり、鳥と空を飛んだり、頭で解決できない難問の答えを見つける為にも活用しました。今でも行われていますが、極一部の光を保持している者だけになってしまいました。

その頃は、またアリ'イがいた時代でも、必要な時には意識だけでメッセージを送り、その人を家に呼び戻す事ができました。'アウマクアはいつも家族を見守ってくれていたの、何も心配せず、いつも心で安全と健康を信じていました。'アウマクアは、私たち人間ができない部分を色々な面で補ってくれていました。これは最良の家族構成だと思います。一部が人間として学校（学び）を共にし、残りの家族は上から私たちを見守り、導いてくれているわけです。

私たちの時間は時計で計るのではなく、昼間、夜、月のサイクル、特定の星の出て来る時間で計られていました。それなりの時間感覚はありましたが、時計程厳密ではありませんでした。昨日も今日も明日も一つです。前にもここにいたし、また来生も戻ってくるでしょう。ここに来る理由があるわけです。それは学ぶ為。何度も戻って来ないと学ばない場合もありますし、早く習得できれば、反対側の世界から家族を見守り、導く立場になって旅を続ける事になるでしょう。

たくさんの学びがありました。誰にとっても一番難しい学びは、マインド・パワーと拳（暴力）のパワーは同じ肉体の中に存在する事ができないという事でした。パワーはどちらか一つだけに与えられます。

子供の頃の私にとって理解するのに時間がかかったのは、'アハ' 'アイナあるいは'アハ（家族会議）に実際に集まっている家族は半分だけで残りの半分は先祖という目に見えない存在だという事でした。先祖も会議に出席していて、問題を聞き援助してくれます。その援助の方法には色々ありました。スピリットとなっている家族は、光の存在を完全に理解していて、石の持つパワーと問題についても理解していました。彼らは私たちを常に祝福し、光と愛を送ってくれています。夢の中でヒントをくれたり、人生で転ぶのも見届け、そこから立ち上がるのを助けてくれます。そしてまた幾度となく、繰り返し、光の道へと導いてくれるのです。

家族全員が夢の解釈に長けていました。子供がしゃべり始める頃から夢について皆で話し合いました。夢を通して、子供は自分の欠点を認識し、それを正していきました。過去や未来に関して、又体の健康についての注意すべき事等も夢を通してメッセージをもらいました。子供が大人になったらどういう存在になるか予知する夢もあり、又子供たちの名前はほとんどが夢を通して提示されました。先祖のスピリットたちのガイダンスなしで子供の名前が決められる事はけしてありませんでした。その夢を見るのは、両親だったり、祖父母だったり、長老だったりします。

夢のレベルには四段階あると学びました。一つ目が肉体的な事に関する夢。二つ目が家族に関する助けや注意が必要な時。三つ目はメンタルな夢で自分に関して学ぶ内容でした。このタイプの夢に関しては教室で更に理解を深めていきました。四つ目のレベルはスピリットとしての夢です。この夢を見ている時は、肉体を離れ旅をするのです。この夢に関してトレーニングを積んでいる者は、虹の向こう側に行き霊的な家族と対話する事ができます。

ハワイアンは、人生は川のようにずっと永遠で何世も生まれ変わり繰り返して行くものだと信じていました。その人生はこの地球に入ったり出たりする流れの中で、毎回新しい体験をし、常に前に進んでいくものだと考えました。過ちを犯したからといって後ろに下がらされる事はなく、

考える時間が与えられ、また過ちを正し、新しいスタートをきって人生を続けて行くと教えられました。「罪」という言葉は存在しませんでした。後に宣教師から「我々は罪深い」と教えられ、はじめて「罪」という言葉をハワイ語でも作らなくてはいけない状況になりました。

これがハワイの教えと宣教師が持ってきた聖書との大きな違いでした。彼らは人生は川のように永遠の流れではないと信じていました。人生は一度切りでもう戻って来る事はないと言いました。彼らは善意で言っていました。一生懸命説教していました。彼らは愛について語り、愛を教えようとしていましたが、本当の愛を知らないのです。彼らは、「汝は～するべからず」と教え、私たちが笑って、人生を楽しんでいる事に対して怒ったのです。楽しむ事は禁じられ、苦しみからのみ救いの手が来ると信じていました。ハワイの神々はもっと寛大で太陽や雨を愛するのと同じように喜びや楽しみを愛しました。そして汗で光ったり、海の水を浴びた肉体のあるがままの姿を愛していました。外国の神は、その反対に身体は男女、子供も皆覆い隠す事を要求しました。自分の子供たちのあるがままの姿を恥ずかしく思ったのです。宣教師はそれを信じていましたが、私は必ずしも彼らが正しいとは思いませんでした。

イエス・キリストは愛ある人でした。彼は愛を教えました。イエスに関して書かれている事はすべて愛に満ちていました。彼の教えは、私たちが子供たちに教えた事と同じでした。蹴り返される事を承知の上でないなら蹴るべからず。いじわるな言葉は、石よりも痛いから口にするべからず。年寄りを愛し、両親を愛し、姉妹兄妹、赤ちゃんを愛せよ。愛を与えれば与える程愛はあなたの人生に戻ってくるという教えでした。

しかし、宣教師たちは必ずしもイエスの言っていた事を聞いてはいませんでした。彼らが作ったルールと生活様式はイエスの教えとも聖書とも違うものでした。彼らのルールは、彼らのマインドと心によって作られたものでした。キリスト教という厳粛な宗教の信者として規律を守る事に懸命に努力をしていました。私たちのカナヴァイ（法則）よりも遥かに厳粛な戒律のある宗教でした。彼らの神様は、きっと彼らの苦しみに耐える姿をも愛し続けた事でしょう。

私もイエスは愛していましたので、彼らの会衆となりカルアアハに教会を建てる手伝いをしました。彼らの生活様式に沿って生活するように努力しました。理解できない部分はたくさんありましたが、彼らが先生で私は生徒という立場に置かれていたので、先生を尊重しました。体は覆い隠し、アヴァは飲まず、安息日にはサーフィンもせず、一日中座って説教を聞きました。楽しみとしていた事はほとんど放棄しました。彼らの法律の多くは理解できませんでしたが、自分の心に止めておきました。一度だけ「イエス・キリストは、何人の妻を持ち、何人の子供がいたのですか？」と質問した事がありました。彼らはショックを受けたような顔で、「彼には妻はいなかったのですよ。彼はピュアーだったのです。」という答えが返ってきました。

ハワイではピュアーの意味は、パワーが充満している状態をいいます。石が全くない状態です。それと妻の有無がどうして関係があるのか理解できませんでした。誰がイエスの面倒を見たのでしょうか？誰が彼に食べ物を作っていたのでしょうか？彼の旅には誰が付き添い、疲れて寝る時には誰がマットを引いてあげたのでしょうか？疲れた筋肉をマッサージしてあげたのでしょうか？これらの仕事はすべて弟子たちがしていたのでしょうか？

デーミアン神父が島に渡来しロバに乗って現れた時、私たちは彼を快く迎えました。食事を与え、寝る所も用意しました。私は彼にすでにイエスの事は知っていて、彼の事を愛していますと伝えました。彼はとてもうれしそうでした。次に彼が訪れた時、彼は私たちに聖水をかけ祝福してくれました。とても素晴らしい日でした。私たちにもとても楽しい時間でした。デーミアン神父は、ハレプレ(祈りの家)を建てたいと思っていました。私たちはその家を建てる事に協力する事を約束しました。私たちは自分たちの神々の家がありましたので、彼の神にも家が必要だと思ったからです。

デーミアン神父は、とても静かな人で私たちに怒鳴ったり怒ったりした事はありませんでした。私たちがなぜある種の事を信じているのか質問しました。私たちは彼が大好きでした。ずっといてほしかったのですが、いつもロバに乗ってまた去っていきました。キリストは家やベッドを持たず旅をしたので、自分も同じように人々に天なる父が私たちに与えた愛を説いて歩きたいのだと言っていました。彼を見てイエスの事を学びました。二人とも孤独に生き、誰も彼らの世話をする家族はいなかったのです。彼らはオハナを持っていなかったのです。

ある日、デーミアン神父がやってくると学校やカルア'アハの教会の先生たちが言いました。そしていよいよ彼の為に「祈りの家」を建てはじめる事になりました。家族の中で洗礼を受けたものが一斉にカルア'アハに集まりました。キリスト伝道所の父母たちは、私たちの事を怒りました。彼らは、デーミアン神父は光ではなく闇の存在だと言いました。彼の長いコートはしっぽを隠し、帽子は角を隠しているのだと言いました。私たちは大変ショックを受けました。この問題について家の帰り道ずっと話し合いました。マカヴェリヴェリは、いつも言っていましたー 真実は昨日も今日も明日も変わらないと。数百年前真実だった事は数百年経った未来でも真実だと。でも今の状況は私を混乱させました。双方共聖書を持ち歩き、神の愛とイエスの事を話し、祈りの家を信じ、安息日に会い、一日を清く正しく過ごす事を信じながら、片方が片方を光ではなく闇の存在であると言うのです。家に辿りついた時に私たちは結論に達しました。デーミアン神父が来たら、彼のコートの裾をめくり尾があるかどうか、帽子をはずして角があるかどうかを確かめるという事です。もしも尾も角もなければ、彼は光の存在であり、「祈りの家」を建てる事に協力しようという事になりました。

デーミアン神父が現れた時、皆興奮していました。小さい子たちも興味津々で皆コートの下に何があるのか見るのを楽しみにしていました。神父に説明する間もなく、子供たちは彼のコートをまくり上げました。堅そうな形の良いお尻があった以外特に何もなく普通でした。私たちはとて

も満足しました。石は、私たちにノンセンスを信じさせようとした人たちのものだったという事で事件は解決しました。そしてデーミアン神父は、集会所を手にしたのです。

時間の観念は、カソリックであろうとプロテスタントであろうと、私たちとは異なるものでした。彼らは、すべて早急を要していました。彼らはいつも急いでいました。私は、なぜ彼らはもっとその場その場を楽しもうとしないのか不思議に思いました。私たちは、いつも予兆のサインを確かめ、良い時には進め、良くない時には待つ事をしました。教会を建てる為に大変な思いをして海岸から岩を運んだ後に大雨に降られ、すべてまた海岸に押し流されたのでは馬鹿らしいです。岩たちが教会の一部になりたいと感じた時、空や海、波が教会を建てるためにどの岩や珊瑚、オヒアの材木を使ったら良いか教えてくれた時に私たちはその通りに動きます。そのサインが来るまでは、日々の仕事をやって待つのです。

ハワイアンの中には、アオ（日中）があり、その時間は自分たちの為、また家族や隣人、長老、子供たちの為に労働に費やす時間とされていました。日が沈んだら仕事も終わりです。くぎを打つ音も消え、床を掃除する事もやめ、髪も切らず、皿も洗いません。日が沈んだらまた日が昇るまですべて仕事はやめます。ポー（夜）は、体を安め、昔話をしたり、チャントや歌を歌い、スピリットの家族と共に家族の輪を整える時間でした。喜びと愛を交わす時間でもありました。このポーの時間は永遠に続くものであると考えられていました。

Huliau

フリアウ

変化の時代

すべてを知る必要性がある境遇におかれなければ、私個人的には、血を分けた自分の両親が誰かという事は全く知ろうと考えなかったでしょう。もともと、実の両親に育てられていませんでしたし、ハワイでは、子供たちは皆一つの‘オハナ’の子供であり、一組の両親のものという考えが無かったのです。

祖父カイ-アケアは、色々な事で有名でした。ク-ヌイ-ア-ケア カメハメハは、何度か祖父にアドバイスをもらいに、またサインを見てもらいに訪れました。祖父は、アリ’イであり島々を統一し、やがて王に君臨した彼を尊重しました。カメハメハは、カウア’イ島のチーフから賞賛を受け、全島の王として認められると、すぐにマウイ島のハナにあるキハ ヴァヒネという私たちの先祖が埋葬されているヘイアウを訪れました。彼はそこで感謝の祈りとお供え物を捧げました。また王は、

その後モロカ'イ島に立寄り、祖父に会いに来たいと伝えてきました。父の作る漁網がほしいとも伝えてきました。

父、ペ'エルアは、島中で一番の丈夫な漁網を作る事で知られていました。チーフたちは、皆父の作った網をほしがりました。王が彼の網をほしがっている事を知り、父は丹念に最上の網を作ろうと気合いを入れて仕事に打ち込んでいました。

王が訪れる日が近づいて来ると、父は数枚の網とサツマイモや七面鳥、黄色のカパ等の贈り物を用意しました。大量の贈り物はとても重く、家族が運ぶのを手伝いに行きました。

彼らは、王や祖父が到着するずっと前にカウナカカイについて準備しました。父ペ'エルアは、家族の中では若い方でしたので、すべて用意を整える責任がありました。家が建てられ、宴会の用意が成されます。祖父カイ-アケアが到着した時には、既に村の人たちが勢揃いしていました。王とその妻たち、家来たちを迎える為の家は、最高級のピリ草の屋根とラウハラを編んだインテリアで作られました。祖父カイ-アケアとその家族の為にも家をこしらえました。父の家族や他のゲストの為にもこしらえました。

カメハメハは、二人の妻と美しい姉モク アロハ（カ'ア フマヌ）と妹カラクア（カ-ヘイ-ヘイ-マリ工）を連れてきました。カライモクと弟のボキも一緒に出席していました。父も祖父も王がマウイ島のチーフや家来だけを連れてきたので、少し驚きました。マウイ島のチーフたちは、祖父の事をよく知っていて、我々家族は大変尊重されていました。

私の母となる若い娘が女王の召使いとして出席していました。母はモロカ'イ島で育ち、父方の家族全員をよく知っていました。母がカウナカカイに滞在していたこの時、父が惚れ込んで、母も彼を受け入れました。そして父の最も若い妻として迎えられたのです。

数日の宴の後、父ペ'エルアは、祖父カイ-アケアと王と共にマイカ（古代ハワ'イのボーリングのようなスポーツ）場を訪れました。母ルアヒネは、従姉妹たちの世話をする為に残りました。ルアヒネは年も若く、立場的には大した身分ではありませんでしたので、必要な仕事は何でもして手伝いをしていました。

男共が帰ってくると、王への贈り物はすべて船に積み終えてあり、挨拶を交わした後、ハワ'イ島コナの皇帝へと戻って行きました。祖父はカラ'エの自宅に戻り、父は新妻と共にカマロ'オの家族の元に帰りました。父ペ'エルアはその時 49 歳でした。そして彼が 50 歳の時に私が生まれたのです。

ペ'エルアは、母の前に二人の妻をもらっていました。一人はマイと言い（カ'ア カウ'エレとも呼ばれた）兄妹でもありました。もう一人は従姉妹のホ'オピ'イでした。彼女は、最近新しい夫をもらい、夫も前の奥さんを連れず、彼女と二人だけで新しい家を構えました。

祖父の先祖であるキハ ヴァヒネは、戦争で勝ち捕れるものは何もないと言っていました。男同士が兄弟として共に座り話し合う事で問題は解決できると彼女は主張しました。彼女が他界した

時、彼女はモ'オの女神として祭られました。そして彼女の住んでいた場所にプアニウ（埋葬の家）を建てました。マウイ島のハナ、ハネ'オ'オという場所にあります。カメハメハ1世は、彼女の像を作り、どこに行くにも持ち歩いていたそうです。全島の統治の栄光を彼女に捧げるように王は、キハ ヴァヒネの色であった黄色を自分の色とし、平和な生活を願う彼女の思いを引き継ぎました。王は、マウイ島のウル-マ-ヘイ-ヘイ-ホアピリを彼女のガーディアンとして任命し、王が移動する時のキハ ヴァヒネ像の管理を任せました。

カメハメハが祖父を訪ねに来た時、キハ ヴァヒネ像とその管理人ウル-マ-ヘイ-ヘイ-ホアピリは、祖父の家の目の前の家に滞在しました。その同じ家で私が誕生したのです。

私は翌年の2月28日に生まれました。私が生まれようとする朝、空がとても静かになり黄色に染まっていたそうです。私は産声を出さず、変わりに母の産婆の着ていたカパに手を伸ばし掴んだそうです。そのカパは黄色だったのです。たくさんのサインがあり、古代のキハ ヴァヒネがもしかしたら私に宿り再来したのではと言われました。時が来たらわかる事でした。その名前を長い事私に知らされませんでした。私が善良に尊敬されるような生き方をしていなければ、その聖名は一生私に与えられる事はなかったのです。

生まれた時に与えられた名前は、カイリ'オヘ（スナッチャー／すばやく手に入れる）でした。この名は、父の姉であり、千里眼の持ち主であった偉大なるマカ ヴェリヴェリがつけたものであり、ホ'オピオピオ（秘技）のトレーニングに備える目的でつけられたのでした。

マカ ヴェリヴェリは、予言者として有名でした。彼女の父カイ-アケアは、彼女が小さい頃から何か普通ではない特別な存在であった事を信じていました。彼女は、家系に多い特徴で頭の右側に白髪の太い縞が入っていました。祖父は、彼女に知っている限りの秘技を伝授しました。天候の読み方、潮の流れの読み方、星やオーメンの読み方や意味、雲の読み方、古代からのチャントと誇りとする家系のチャント。そのすべてを習得し、他の誰よりも智慧を持つ彼女が、今私の先生となったのです。

大きな事をやる前にまず小さい事を学ばなければいけませんでした。最初の数年は、完全服従を学びました。二度同じ事を言われぬように、一度で言われた事をこなす、良く耳を澄まして口答えをしない、忍耐力、協調性、読解力、仕える事を学びました。頭の堅い若い頃の私には容易な事ではありませんでした。これらができるようにならないと次には進めません。ゆっくりと、本当にゆっくりと学習を重ね、できるようになって行きました。どんな些細な仕事でも文句を言わずにやらなければいけません。この時代は、教室だけでなく、家族の中でも子供たちは年配者に質問をしたり、言い争う事はしませんでした。これをやれと言われたら、文句なしにやるだけでした。疑問に思ったり、口答えをする等考えられませんでした。よく観察して学ぶという方法でした。言われた事を素直にやり、口は閉じておく事が常識でした。

マカ ヴェリヴェリの学校で学ぶ女生徒は、皆ベストを尽くし真剣に学びたいと思っている子ばかりで、私を辛抱強く支えてくれました。小さい子は年上の生徒のまねをしました。皆、目的は同じだったので一心同体となり共に協力し学びました。

私が年をとった後、もうその手の学校が存在しなくなり、よそ者たちは、どんな魔法を習ったのか、こういう場合の魔薬の調合は何か等の質問をしてきます。私たちが学んだ授業のほとんどは、薬草の調合等ではなく、内なる目の使い方でした。心で見る事でした。他の人の事を理解するには、その人に周波数を合わせるのです。自然の環境に対しても同じです。親切な心、思いやりを自分と廻りの人々、廻りのすべてに持つ事でした。

物質的な事ではなく、価値観について学んだのです。彼らは価値観を知らない、的外れな事を言ってきました。人々の心、家族、魂の成長 — これらが最も大切な要素です。所有する物質的なものは、多くの場合石となり、成長の妨げとなります。自分の存在についてではなく、物質を所有する事に執着が出ると、フォーカスがずれ、混乱が生じます。

この事態は、私の家族の中でも子供たちに起きました。宣教師たちが教えられた事を間違った向に解釈したのです。心で聞く事を忘れてしまったのです。一人の娘は清らかである事を神が望んでいると解釈していました。お互いを愛する事はどうなってしまったの？娘の子供たちは、きちんとテーブルに腰かけ、片手はひざの上におき、もう片方の手で一滴もこぼさずに食事をするというしつけをしていました。テーブルを離れた途端喧嘩し騒いでいるのです。子供たちはストレスが溜まり、母親もみじめな思いをしていました。彼女は自分の子供たちがどうしてこういう態度をとるのか理解できないのです。

私の子供たちの中にも「物」に執着する子たちが出始めました。西洋人たちが持っていた物がほしいと思うようになったのです。彼女は物ほしさの為に馬鹿な行動をたくさん取りました。でも後に彼女は、物をほしがると自分のマナの力が無くなり、頭痛の種が増えて来た事に気がつき、自分の過ちに気づいてくれたのでほっとしました。物に執着がある限り、心とマインドを正しい方向に維持する事はできません。

モロカ'イ島に起きた変化、人々が自分の光のボールから光を消していったのは、宣教師のせいではありません。外国人は島にそのずっと前からいました。

ヒッチコック神父と妻がモロカ'イ島にやってきたのは1832年です。皆「首長（くびなが）」と呼んでいました。肩から頭がずっと上にあるからでした。カルア'アハでは、王の母親が彼らにキリスト伝道所を建てる為の土地を与えました。私たちは、土地を更地にして、彼らの言う通りのものを建てるように命じられました。土地は祓われ、希望の家が建てられました。彼らの住まいと集会所の部屋が設けられていました。ウィークデーは縫い物や読み書きの授業に使われ、日曜日には聖書の勉強に使われました。

私は、ハワイの古いやり方とイエスの教えを同時に受け入れる事に何の問題も感じていませんでした。聖書からの教えは、ハワ'イの教えと相反するものではなかったのです。イエスは「神は

愛である」と言いました。彼は自分の光を茂みの下に隠すべからずと教えていました。彼は、種を岩だらけの地面に投げても育たないと言いました。これはハワイで子供たちに教える事と同じでした。

私のお気に入りの話の一つに税金徴収人の話があります。アリイが到来してから税金を徴収されるようになりました。カウイ-ケ-アオ-ウリ（カメハメハ三世）は、幾度となく税金の値上げを繰り返しました。王は、税金徴収人を各島に送り、金額を伝えにきました。私たちの生活を大変苦しめました。税金徴収人という仕事に就こうとする事自体、理解に苦しみますが、その徴収人を愛する事は更に難しい事でした。イエスが私たちにこのようなレッスンをお与えになった事で気がついた事は、どこに住んでいようと、いつの時代であろうと、人々は常に同じ問題を抱えているのだという事です。皆、同じようにニーズがあり、欲望があり、光と石をかかえていました。私が学んだ事がより強く自覚され、遠方から来てイエスの教えを私たちに教えるこの人たちを助けてあげたいと思ったのです。

イエスは、カウラでした。山の頂上に到達した人です。彼はすべてが見え、見えるものすべてを理解していたのです。彼は私たちが皆到達したいところにいました。

私たちは、幾度とカルア'アハに旅しました。宣教師たちも又島中旅していました。私は、すべての行事に参加していました。他の兄妹たちは皆結婚していましたが、私はまだ独身だったので助っ人が必要な所にはどこへでも行きました。それ以外は、読み書きを学んだり、キリスト教の本部で売っている布を使って洋服を作る為の縫い方を学んでいました。黒いギンガムのベストがお気に入りでした。白を着れるようになるまでには、数年かかりました。私にとって白は、多くの人を死に至らしめた'アナ'アナのイメージが強かったのです。ハワイアンで白を着たのは、彼らだけでした。

カルア'アハには他島から新しい移住者が入ってきて、先住の人たちで去って行く者もいました。新しく到来した人々は愛を教えていましたが、恐れも一緒に持ってきました。彼らは、恐れを持って生活し廻りにも影響を与えていました。多くのハワイアンたちは、恐れというものを知り、その恐れ故に古い習慣や信仰から離れていきました。家族と家族が対立するようになりしました。私がヘイアウやハラウに行こうとすると、後ろ指を指されました。私がヘイアウに座り瞑想をしていると、家族の中でそれを見て驚き呆れ、キリスト教の本部に言いつける者もいました。その後、私は教会のメンバーから一時的に外される事になりました。その為、それ以降は夜に行き夜明けに帰ってくるようにしました。昔なら私が夜男性と共に過ごして帰ってきても、皆ただクスクスと笑って指を振るくらいだったのに、なんと不思議な世の中になってしまった事でしょう。

昨日の楽しみは、裂けて消えて行きました。土地に歌声は聞こえなくなっていました。私の民は、西洋人がやる事をまね、彼らと同じになりたいと思うようになってしまったのです。西洋のドレスを着、ボネットや帽子をかぶり、挨拶は握手になってしまったのです。優先順位も変わ

ってしまいました。年長者は無視され、十分な食事も与えられず、用事も誰も助けてくれなくなりました。年長者たちの元に行くべき物は、自分たちが西洋の品物を買うために売られていきました。

日曜日は、仕事をしてはいけない日でした。そして、週に一日は王の為に農耕作業にいかされたので、自分たちの為の仕事の時間が短縮されます。家族の人たちの多くは、何度も聞いた同じ話を聞くために、ただ宣教師たちの後をついて廻り、家の農耕作業などはほったらかして行きました。宣教師は、「自分たちの宝は、すべて天に貯蔵しておきなさい」と言いました。それを聞いた多くの人たちは、すべてイエスがめんどろを見てくれるから、もう家の仕事はしなくて良いのだと思いついてしまったのです。そんな事をイエスは言っていない事は私にはわかっていました。彼は漁師達に「自分について来るなら人間を釣る漁師にしてあげよう」と言いましたが、けして「もう漁はもうしなくて良い」とは言っていない。

残された家族は、夜は神聖な時間という理由で、夜も働かされました。私たちの習慣にはない事でしたが、夜も昼も神聖だから、別に夜働く事に文句は言いませんでした。しかし、一日 15 時間から 20 時間の労働となると、体は疲労し、病気になりがちでした。隠居した年長者がまた漁や畑に戻るはめになりました。古き良き昔とは、かけ離れた生活になって行ったのです。

1840 年代は、変化の時でした。他の島々からのうわさで、ハワイにカトリック教というものが入って来た事を知りました。疫病も同時に到来し、最愛のクム、マカ ヴェリヴェリも死に、キハ ヴァヒネの像のガーディアンをしていたホアピリとカ'アフマヌの美しい妹、カラクアも死んでしまいました。人々は次から次へとひどい高熱になり、熱を冷ます為に海に入り、そのまま溺死してしまっただけです。

マウイ島に向かう帆の高い船が私たちの島の前をしょっちゅう通って行きました。食料がなくなると、私たちの島の前でアンカーを下し、ボートに乗って数名が立寄り、必要な物を要求しました。用意した食べ物に対して支払いをしない事もしょっちゅうでした。ハワイアンは、泳いで追いかけて、しばし喧嘩になる事もありました。女共は泳いでセイラーたちと一緒に時間を過ごしに行きました。セイラーたちは、ケ アリ'イ オ ケ カイ（海のチーフ）と呼ばれていました。彼らは、人々が欲しいような物を持っていました。男共は妻達を送りだし、鏡、鍋、フライパン、お菓子、農耕具などを調達させました。キリスト教の本部で買うよりもよっぽど簡単に入手できたからです。未婚の女共は、単に船の上でチャホヤされたり、プレゼントをもらえるのがうれしくて行きました。ハワイアンは、セックスの為に甘い言葉を囁いたり、プレゼントをくれません。セックスは自然の習わしであると考えたからです。故に、多くのハワイアンの女共は、ハオレ（白人）と一緒にいたいと思いはじめたのです。

いろいろな問題をかかえながらも島は繁栄して行きました。カリフォルニアに、ククイ・オイル、じゃがいも、さつまいも、その他野菜も色々と輸出して行きました。東海岸から廻ってくるのを待つよりも、ハワイから輸送した方が早かったようです。ハワイは、カリフォルニアに牛肉、豚

肉なども輸出していました。カリフォルニアにゴールドラッシュが起きた時には、多くの男共が島から居なくなりました。一攫千金を狙って、船に乗り込み遠い土地へと離れていきました。他の者たちは、彼らが去った後の穴埋めの為にホノルル、ヒロやラハイナに出向きました。家族はみんなバラバラになっていきました。

同じ時期に政府は、あまりにも男性が島からいなくなったので、チーフたちに土地を所有する権利と称号を与える事にしました。私たちに全く理解できない処置でした。さらに、住民全員の登記簿を作成する法律ができました。裁判所に書面で公式に登録するというものでした。18歳以上なら好きな名字を取る事ができるというのです。18歳未満は実父の名字を記入するように言われました。名前を得る事も土地を得る事にも興味を持たない者もいました。人によっては、時と場合に応じて違う名前を名乗り、白人の名字を取るものもいました。これらの法律は、私たちには、理解しがたいものでした。これらは、外国人の作った、外国人の為の法律のように思えました。その法律に従わなければいけない理由がありませんでした。そして土地をもらうべき者がもらえず、もらった者の中で登記しなかった者は、土地を失っていきました。

父は1866年まで生きていました。ペ'エルアが彼の名字となりました。彼の息子キモはオピオという名字を登記しました。キモは、年を取るとペ'エルアとオピオ両方の名字を使っていました。人によっては名字が違うので、別人だと思っている人もいましたが同じ人物だったのです。父には17人の子供がいましたが、カ'アオラー人とその息子カ'アカウ'エレだけがペ'エルアという名字を継承しました。

学校も更に名前というものを複雑にさせました。多くの先生たちは、ハワイアン・ネームを使用する事を許可せず、クリスチャン・ネームで生徒たちを呼びました。家では、ハワイアン・ネームを使い、法律ではま違う名前を持っていたのです。とても複雑でした。

1855年に私は結婚しました。主人は、新しい宗教にも私がハラウで数年かけて学んだ事についても無関心でした。ハ'オレの法律は自分には関係ないと考えていました。彼は大酒飲みで、家にあまりいませんでしたが、あー私は彼に本当にゾッコンでした。彼は私に家族を与えてくれ、誇りに思える子供たちを与えてくれました。彼が他界した後、私はマウイ島のルクナ カ キコプア ウアウアと再婚しました。彼は宗教心の強い人で私や子供たちが少しでも教会の戒律に反した事をするとすぐに批判しました。子供たちは、彼に全くなつかず、彼は自分の「善良な姿勢」を尊重してくれる女性の元へ去っていきました。私たちは、皆ハッピーになりました。私には、まだ兄妹という家族がいましたし、子供を育てるのに男はいりませんでした。

私は子供たちに私が習った事を教えようと努力しました。イエスとハワイの教えに違いがない事も教えようとしました。すべてにはバランスが必要である事を教えました。

子供たちは、私の話を聞きながら、目は皆が着ているフリフリのドレスやペティコートに向けられていました。私の言っている言葉は聞き流されている事もよくありました。私は、「物」は魂の成長の妨げとなり、内なる目で見える力を邪魔する物になる事を教えようとしました。皆、違う

価値観の元に暮らしているようでした。私は私が信じるものを守っていく事が安全だと考えました。孫たちが誕生しはじめ、家では大歓迎しました。私は孫たちにも教えようと試みましたが、孫たちは全く聞く耳を持ちませんでした。彼らは、すべて間違っただけを知りたがりませんでした。清らかである事を好み（少なくともそれを善良だと信じていました）、白人の先生たちの話を聞き（家の長老や親の話は無視しました）、西洋人のようなドレスを着て、西洋人を演じました。仲間と喧嘩をし、長老たちに口答えしました。

私は子供たちを集め、これ以上皆が墮落していくのを見ていられないと伝えました。子供たちに過去の事を伝えなかったのです。チャントは教えませんでした。物語として歴史を伝えました。ただ愛を語るだけではなく、本当の愛が何かを教えたかったのです。愛のないところに神はいないのです。

娘であるルアヒネは、私に子供を一人くれました。自分の子供として私が育て、必要と思う教えを伝授してほしいと言いました。彼女は私を信頼してくれていました。もう一人の娘カウイは、自分で子供たちに伝えていくと言いました。そして、もう一人の娘メレは、私の助手をして教えの伝授に手助けしたいと申し出てくれました。それから事ははじまりました。子供たちは、政府に定められた学校が終わると制服を脱ぎ、作業着に着替えました。

庭の草刈りをしたり、マットを作ったり、魚を釣ったり、リム（海藻）を穫る間家族の歴史を学びました。口答えやふざける事を許さなかったため、孫たちは、私の事をいじわるな老婆だと思っていた事でしょう。政府の学校から帰ると何を学んだか問い正しました。学んできた事が正しいければ、正しいと伝え、間違っていれば、それも伝えました。私が知らない事であれば、ラハイナやホノルルに行った事のあるコミュニティーの仲間に相談し、正しいかを相談し、その結果を孫たちにも伝えました。子供たちが学ぶと同時に私にも学びがありました。

時が経つにつれ、家族の他の子供たちも私のところに来るようになりました。私がハラウで習った事は、キリスト教社会の中では公に言えない内容も多くありましたので、本当に信頼できる子供たちだけにのみ教えました。先祖と対話する事や生まれ変わる話などは特に禁物でした。みんながハワイの信じてきた道を知り、ハワイから見た世界観、そして何よりもハワイアンである事に誇りを持つ事を教えようと努めました。多くの時間を政府の学校で教える内容と異なるハワイの本当の歴史を教える事に費やしました。常にオハナという家族観を強調し、「家族」が家族ごとにすべての規律を形成した事なども教えました。

最終的には曾孫の代も数名参加してくれました。子供たちの家族の中には、カソリック教徒になった者もいます。カルア'アハのプロテスタント教徒になった者もいますし、モルモン教徒になった者もいます。何人かは、私の教えを信じ、すべてに光を見出す生き方を選択しました。みんな教会には行きました。私にとってはどこでもよかったのです。神は愛であり、彼は教会だけでなくどこにでもいるのです。

絵

山には幾通りもの登り道がある

Ka Hopena

エピローグ

終章

クー、ゴッド、エホバ、アラー、内なる光、愛 — ひとつの永久的な真実。そのような偉大な存在は、私たちが彼をなんと呼ぼうと関係ありません。小さな心の持ち主が物や人にレッテルを付けたがるのです。愛は、すべてを受け入れ、すべての存在と状況を包み込むのです。人間は、選択の権利を与えられました — 善と悪、神になるか石になるか。

私たちは、生まれながらにどんな事もできる完全なるパワーを与えられています。その力をいかように使うかも自分の意志で決める事ができます。自分のボールに石を入れない様に守ってあげれば、未来に行ったり過去に行ったり、天使と歩いたり、高い所に登り、パラダイスに住む事ができます。

自分がどこにいて、どういう存在になるのかは、すべて個々の決断次第です。

私たちはみんな一つです。永遠の輪の一部です。人と人の間にも、肉体を持っている者と霊体のみとの者の間にも、境界線はありません。人間がこれとかあれしか信じないと言った時に自ら目

隠しをする事になるのです。目隠しをしていては、世の中の美しさや壮麗さをも隠してしまい、至高の子供である事！宇宙の継承者である事！—我々が偉大なるものの一部である事も見えなくしてしまいます。

付録 A

115年の生涯をモロカイ島で終える

(Advertiser, March 11, 1931 に掲載された記事)

カマロ、モロカイ — 3月9日 —
モロカイ島の住民として100年以上暮らした、
カイリオへ カメエクア夫人、115歳が昨日の
午後ひと月程続いていた病状が悪化し死去。
家母長は、1816年2月28日、モロカイ島、
マプレフ、カオイオに生まれ、その後マウイ島
に数回訪れた以外は、カマロで一生を過ごしま
した。

カメエクア夫人は、数年前までは活動的にアウ
トドアを楽しんでいました。魚釣りに熱心で、
ハワイの伝統芸術の継承者として、特にラウハ
ラ・マツトとハワイアン・キルトの分野で名が

知られていました。一年前に視力低下の為、これらの製作は余儀なく断念する事になりました。それでも人生の最後までモロカイ島の人々や行事に熱心に興味を示されていました。

葬儀は今日午後3時より自宅で行われます。埋葬はカマロのカトリック墓地にて、ヘンリー神父によりとり行われます。

彼女には三人の娘がいますーカマロ在住のメリー・カメ'エクア、カラウアパパ在住のアニー・マクラニとホノルル在住のカウイ・パイア。その他に数名の孫とたくさんの曾孫がおり、その中の数名はカマロとカブレイにて、カメエクア夫人によって育てられました。

付録 B

モロカイ島に関する

1880年の国勢調査レポートより

「。。。私はマウイ島から船で向かった。7マイルという短い距離でありながら、向かい風と潮の流れに逆らったので、港に辿り着くまで1時間弱かかった。この島の住民は、大変に豊かで、白人の疫病にもかからず、木造の家を持ち快適に暮らしている様子に大変驚いた。大きな畑を所有し、果物の木々、タロ芋や魚も豊富にあった。非常に肥沃な土地で、'ウアラプエとカマロ'オにはサトウキビ畑があり、大変将来性のある島だ。大きな生け簀が島を囲むように設置され、元気そうな魚が波うねりするようにたくさん泳いでいた。野生のアヒル、ハワイのガチョウ、チドリ等他にもたくさんの種類の鳥達が豊かに生息している。モロカイ島は、人間が住める最高の場所だと感じた。ここの住民は大変祝福されている。景観も素晴らしく、天候も理想的だ。しばらくここに居たいと思う程である。」

付録 C

The Mo'ō モ'オ 龍

モ'オは私たち家族にとって、そしてアリ'イの時代以前からハワイに住んでいるすべてのハワイアンにとって、大変に重要な存在です。伝説に残る中国の龍とも同じですが、唯一違う点は、彼らは一つの時のサイクルとして龍の存在を見ている点です。

それは夜明け前に起きています。龍の目は、家族にガイダンスを与える為に、どの星にねらいを定めるか探しているのです。前足は、ナ オピオ（家族の若い衆）－ いつも忙しくなく、場所を変え、動き回っています。中央の足が両親、カ マクア（家族を確固たるものにする存在）－ 食料、家の供給、若い衆の世話をする人たちです。そして後足は、ナ クプナ（祖父母）は家族に安定感を与える存在であり、助けを必要としている者を常時受け入れ、アロハに溢れ、いつも強い存在です。クプナの背後にはカイ ヴィ(背骨つまり先祖)、肉体を離れた家族の存在がいます。彼らは、この次元以上の領域において、虹の向こうから家族を思い、守り、導いてくれています。それぞれ足は次の一步の準備ができていて、常に家族を良い方向へ向かわせようという思いを持って、常に前に進んで行きます。家族のすべての存在は大きなひとつの輪の一部であり、その輪が完璧なものとなる為に欠かせない、必要不可欠な存在です。

ハワイの先祖にとって、モ'オがどれだけ大切な存在であったかは、ハワイ語に残されています。モ'オレロは、歴史であり伝統を伝えるものです。モ'オリロとは、道という意味です。モ'オク'アウハウ

とは、家系図のチャントの事で、モ'オプナとは、孫の事、モ'オヴィニとは、視覚の事を指し、モ'オ ヴアイヴァイとは、何かの責任を持つ事です。故にモ'オは、私たちの人生のすべての面において登場する必要不可欠な言葉であり、存在です。私たちはモ'オそのものなのです。

写真

アリ'イ到来以前のモ'オ彫刻
モロカ'イ島のカマロ地区

付録 D

この本で紹介したモロカ'イ島における重要な地名

1. カヴェラ

カヴェラは、緑に覆われ果物の農園もあり、豊かな大変美しいな場所でした。1880年の国勢調査員も感動しその美しさをレポートに記録しています。カヴェラにあったカノア・ポンドは、1900年の記録では50 エーカー（約6万坪）という広大な生け簀で、2,860 フィート（約872m）長の囲いによって構築されていました。

2. 戦場のケヴェラ

プクヒヴァと呼ばれた戦争は、カミロロアとカヴェラの間地点が戦場となりました。この場所を戦場とした二つの大きな戦争の一つは、1732年、マウイ島をカメハメハ-ヌイが、ハワイ島をアラパイが統治していた時代に起きました。アラパイがマウイ島のハマクアにあるカメハメハ-ヌイの自宅を訪問していた時に、オ'アフ島のチーフ、カピ'イオホ-オ-カ-ラニがモロカ'イ島を侵略しようとする事がある事を耳にしました。カメハメハ-ヌイは、モロカ'イ島で育ち、島の住民にも深く愛されていた人でした。アラパイも又、偉大なるチーフ マヒの孫息子であり、モロカ'イ島には多くの親戚がいました。

アラパイは二人の司令官、カラニオプ'ウとケオウアをかかえていました。彼らにモロカ'イ島を救う為に行くかと訪ねると、すぐに戦士たちを集めカヌーに乗りモロカ'イ島に向かいました。カメハメハ-ヌイは、父親が他界したばかりで喪中だった為、マウイ島に残りました。

プコ'オにカヌーを乗りつけ、ヴァイアルアからカルア'アハまでアラパイの戦士たちの赤いマロ（ふんどし）が並んでいるのが見えたといいます。

カマロ'オとカプアレイの二カ所で戦闘は繰り広げられ、アラパイの陣営は、そこでモロカ'イ島のチーフたちに加わりました。問題は、モロカ'イ島の男性の多くは神官だったので、戦かおうとしなかった事です。その為戦う者たちにとっては人数が少ない故に不利でした。

オ'アフ島から侵略してきた陣営は、カラム'ウラとカウナカカイに陣地を置きました。日が昇ると同時に腹ごしらえが終わり、戦闘開始となりました。どちらが有利という事なく、4日間戦いは続きました。5日目の明け方、オ'アフのチーフの耳に、アラパイの陣営がかけつけたという情報が入ってきました。四方の丘や家々からアラパイの陣営が流れ込んできます。パクヒヴァにいたオ'アフの陣営に、モロカ'イの陣営が押し寄せてきました。

地元の住民が四方八方から押し寄せ、アラパイの陣営が海から押し寄せました。アラパイの陣営は、モロカ'イの陣営と戦いに参加した神官達と肩を並べて一致団結しました。

オ'アフの陣営は八方塞がりの状態に陥り、その数はどんどん減り、しまいにチーフ カピ'イ オホ-オ-カ-ラニがナキロロアの麓のカヴェラで死去しました。

勝利を喜んで、今まで信仰深い生活をしてきた人々の中でも、アラパイと共にオ'アフ島に去って行く者もたくさんいました。

3. カヴェラのプ'ウホヌア（逃れの地）

西と東カヴェラ湾を隔てる要塞は非常に高く約 137m 程でした。上面は平で約 31 m² ありました。壁は四方に広がり、外壁の囲いの内側には、いくつかの区分があり、その一つはヘイアウ（聖地）です。

4. カヴェラ古墳地帯

カヴェラの東には、戦争で亡くなった人々を埋葬した古墳が幾つかあります。アラパイの陣営、オ'アフの陣営、そしてモロカ'イの戦死者たちがすべてその塚に埋葬されています。

5. カマロ（正式にはカマロ'オ）

カイ-アケアの一族にとって、この土地は深い縁があります。ペ'エルアはここに住居を構えていました。カ'アパフ ヘイアウもこの地区の標高 3500 フィート(約 1067m)の場所に在ります。カマロからペレクナまでは、ラバ・チューブ（自然形成された溶岩のトンネル）が通っており、非常時の非難場所になります。

‘エカハヌイの風の名は、この地区のレペレペ湾の先端に近い場所の地名に由来しています。

またカイ-アケアの親戚が作った小さいヘイアウがたくさんあります。そのほとんどがクーとヒナを祀るヘイアウで感謝や祈りを捧げる場所として建造されました。ティキは在りませんが、私たちはモ’オ族ですので、古来はモ’オ像が存在しました。

6. モ’オの池

カマロの埠頭近くにモ’オの池がありました。まだ生きている人たちの中でも、その池の水がパワフルでヒーリング効果があった事を覚えている者も多いです。長老が話かけると水は静まりました。そして、その水を汲み、病人にその水をかけると病気が治ったものです。

7. プ’ウ モ’オ ヘイアウ

このヘイアウは、子供たちの清めの儀式や家族協議の場として使用されました。L字型をした座段があり、長老たちが座る所でした。上面はすべて表面の滑らかな川石で埋め尽くされていました。

8. セント・ジョーセフ教会

カイリ’オハ、メレアー ティム、ジョー カハ’イ、他多数の親族の墓が埋葬されています。

セント・ジョーセフ教会は、巡業者ダミアン神父のリクエストにより建てられました。彼は月に一度訪れ、神の愛について、イエスという男について説教し、皆自分のマツト持参で彼の話を聞きにいきました。彼の説教を聞きに言った最初の頃は、彼が言う神をハワイアンはクーだと思い、マリア様をヒナ（すべての母）の事だと思い込んで聞いていました。彼は、ハワイにも伝わるような太古の大洪水や大災害などの話もしました。

彼がカルア’アハの宣教師の言ったような悪魔ではなく、神の使いであるとはっきりした時、私たちは彼の望む所に教会を建てる事に協力しました。カルア’アハの教会のように珊瑚でできた大きな教会ではなく、シンプルで小さい木造建築でした。住民も教会を建てる際に木造建築の技術を学んだので、教会の建設が終了した後、数年後にはほぼ島中の住民の家が木造に建て替えられました。

カマロのセント・ジョーセフ教会は、1876年に聖化儀式を終え完成されました。この地域の住民は、この教会に通いながら他の教会にも参加していました。一部の住民は敬虔なカトリック信者になりました。

国勢調査員が1880年にモロカ’イ島を訪問した際、カトリック教会とその周辺の木造の家々や庭の景観の美しさを讃えました。

セント・ジョーゼフ教会のメンバーたちは、カラウパパの施設での活動に熱心でした。たくさん信者がウィークデーに遠方から手伝いに来て、週末に家に帰るような生活をしていました。

そこでは、お年寄りや病人への食事のまかないが行われていました。ダミアン神父にも大好物の特別の“クッキー”というものを作っていました。手の空いたメンバーたちは、病人の世話をしました。コクア（ボランティア）として住み込むの手伝いもしました。信者たちの活躍は目覚ましいものでした。

9. カプアレイ（現在のカプレイ）

カイ-アケアの祖先に大変愛された土地です。カ'ア カウ マカ ヴェリヴェリ が秘技を教える教室を開いた場所でもありました。この土地は、アプア'アといい、山から海辺までを含む広大な土地で、1783年に祖父がカヘキリの将来を透視しアドバイスし、それがすべて当たっていた為にカヘキリよりお礼として贈与された土地でした。

この土地の一部は、ずっと家族によって維持されてきました。土地自体は、私たち、ペ'エルア、オピオ、レオヌイ、カメ'エクア、カナヘレ、ケキノの家族のアウマクアであるモ'オのものです。

カイ-アケアが亡くなった時に、カライ パホアの神々をマカ ヴェリヴェリが持ってきたのも、このカプアレイの土地でした。私たち家族の心は、この土地にあります。

10. カプアレイ ヘイアウ

カプアレイ湾の東側にあります。低い壁面に覆われ二つに区分けされたヘイアウで、カ'ア カウ マカ ヴェリヴェリ がプア神とカポ神を祀った場所です。

ヘイアウの山側は7m四方で一段高台があります。そこは、マカ ヴェリヴェリ が瞑想したり、授業を指導する時に座る場所でした。下段も区分がされていて、最下段は初心者が住み、学びをする場所で、中段は上級生が暮らす場所となっていました。1840年にマカ ヴェリヴェリが死去した時、初心者の暮らす位置に近い所に彼女の墓石が建てられました。彼女のお墓の廻りには、ずっと一緒にいられるようにと、生前も彼女の廻りにいた生徒や親戚のお墓が建てられています。

11. カラエロア港

礁や珊瑚なしの自然にできた港で、ある時代は大変有名な港でした。

12. 西'オヒ'アに在るヘイアウ

このヘイアウには名前がありません。ケアヴァヌイの境界と小川の間であり、高さ30mくらいの場所に在ります。長方形で長さ約37m、壁は30cm程の厚み。テラスがたくさんあり、低い段の方は、栽培に利用されていました。1959年にビショップ博物館の調査員が見に来た時、アリ'イ時代以前のもの（750 BC -1,250 AD）であるにもかかわらず、ヘイアウの状態が驚く程良かった事が記録されている程、丁寧に精密に建てられています。

このヘイアウから 180m 程南にもう一つ古代からの大きなヘイアウがあります。不規則な形をし、元来珊瑚で作られていたようですが、後に石を付け足された跡があります。15m 程の深さがあります。おそらく、この二つのヘイアウは一緒に活用されたのだと思います。一つが生活の場であり、もう一つが学校あるいは寺院（聖地）として使われたのだと思います。

13. ククイ・ヘイアウ、東'オヒ'ア

東'オヒ'アの下の方で国道と交差する所に位置します。このヘイアウは、アリ'イ時代以前のものの中でも最古のヘイアウの一つです。元来は、長さ約 52m、約 37m の幅で北から南へ伸びる方向に建てられました。

カイリ'オヘは、このヘイアウに長老を連れて行く様に父親と家族の衆に伝えました。そのヘイアウを管理するヒーラーが彼はまだ死なないから家に連れ戻すように言いましたが、一行の中の強く元気な若者を指し、君の命は短いと言いました。実際にその若者は、後に息子を助けようとして、珊瑚に足に引っ掛け溺死しました。

14. パグ'イ ヘイアウ、マナヴァイとカハナヌイ

アリ'イ時代以前の様式で建設されたヘイアウ。ヒナを祀ったヘイアウだったがカメハメハ王の時代に破壊されました。カマカウは、このヘイアウはプ'ウカウア（要塞）だったと言います。マナヴァイとカハナヌイの境界にありました。ヘイアウは土の土台で廻りに石の壁面があるような建築様式でした。テラス面のスロープは南向きになっていました。古代の偉大なる予言者がここに埋葬されていた為、この場所は白いティーリーフとククイの木に囲まれていました。また、モロカ'イ島を侵略し、カヴェラで戦死したカピ'イオホオカラニが埋葬されている噂もあります。それが本当だとすると白いティーリーフは不適切となりますが、白いティーリーフとククイの木があったのは、それよりもずっと昔の事だと推測します。

15. カホクカノ ヘイアウ、マナヴァイ

マナヴァイとカハナヌイの境に位置します。ストークス氏の表現の説明に元づく以下の通りです。「その建造物は尾根から四段のテラスに分かれており、上二段は西、北、東に壁面があり、南側の壁面は三つ目のテラスに繋がっている。その他の面はすべて壁面がなくオープンになっている。テラスは主に大きな石から形成されているが、水の流れから生じる磨滅が起きている箇所が多い。場所によっては土が使われた形跡が残っている。特に北側は地ならしがされており土が使われている。」

このヘイアウにまつわる名前として、有名な戦士でアスリートだったカオヘレ、モロカ'イ島のチーフであったクムコ'ア、ハワイ島のケアヴェ イケ カヒ アリ'イの息子とカネアラエが上げられます。カオヘレは、ランナーとして有名で、このヘイアウに住んだチーフたちのガードマンの役

目を務めた人です。ここに住んだチーフたちは、クムコ'ア、ハライ、ムレフとカラニ アヒ イ カ パ'アでした。ヘイアウ自体は、アリ'イ時代以前に建設されたもので、元来は漁の安全を祈願するヘイアウでした。

16. カハカハナ マナヴァイ

この場所は、カパの神々を祀る場所であり、1819年以前は、聖なるカパ（木皮を叩いて作る衣服）の製作が行われた聖地です。チーフ・クムコ'アの時代以前は、神クーと女神ヒナが所有する土地とされていました。

17. 'ウアカプ'エ

カ'ア カウ マカ ヴェリヴェリが1783年にカヘキリに贈与された土地の一部です。ひと昔はタロ芋の水田が並び、池があり、肥沃な土地でした。'ウアカプ'エの土地に吹く風はマカ オ レフアと呼ばれていました。また、この土地には幻の泉ロ'イプナがあるとされていました。この泉にはたくさんの伝説があります。ある伝説は、この泉の水を飲んで死んだとあります。もう一つの伝説には、この土地に住んでいる人のみにその泉は現われるそうで、泉を探そうとしたよそ者が見つかる事ができずに脱水して死んだとあります。

18. ハレ オ ロノ - カルア'アハ

西の谷間口にあるこのヘイアウは、海拔670mの高さに位置します。1800年代に住んでいた人たちは、ここをパフ カウイラ ヘイアウと呼び、地元の人たちが'アウマクア（家族の守護霊）に祈りを捧げる事にのみ使われたとても古いヘイアウだと言っていました。

19. マヒリカ池、カルア'アハ

三つの水門を持つ13エーカー（1万6千坪）の養魚池で高さ約540mの壁に囲まれていました。世紀が変わると共に用途も変わり商業用のボケの養殖池になりました。ここのボケ養殖は、ハワイ諸島一体に輸出され有名になりました。現在は壁が破壊されており、土台部分だけが残っています。

20. カ'オペ'アヒナ池、カルア'アハ

この養魚池は、元来カルア'アハに住む白人の牧師、レックス ヒッチコックが使う為に作られたものです。20.5エーカー（2万5千坪）あり、壁は高さ約530mありました。1933年から3回に渡る津波により、壁はひどいダメージを受けましたが、その度に現在の所有者により修復されました。世紀が変わると、ボケとアホレ-ホレを貯蔵する為に使われていました。1962年にはまだ活用されていたようです。この名前は池の元来の名前ではありません。元の名前は不明です。現在の名前は、グレート・マヘレ（1848年）の時に土地収用委員会により選抜されてこの土地の所有者となった人の名前がつけられています。

21. カルア'アハ教会

1832年11月7日、H.R.ヒッチコック牧師と奥さんがモロカ'イ島にキリスト教教会を設立させる為に到来しました。カルア'ハア地区はハオピリ-ヴァヒネ（カメハメハ1世の未亡人、ホアピリの妻）が所有する広大な土地の一部です。彼女はヒッチコック夫妻を招き入れ、ミッション・ソサエティーというキリスト教の宣教活動の場として、この地区を贈与しました。

ヒッチコックは、まず最初に地元のハワイアンとの協力を得て自分たちの家を建設し、次に学校を建設し、その後大きな珊瑚で建設する教会の計画を進行させました。その教会は英語教室と縫い物教室としても活用されました。そりやつり布等を使って、牛と男性が珊瑚を海岸から運搬しました。キリスト教と縁の無い者も含めてモロカ'イ島東部の住民の多くがこの大きなプロジェクトに参加しました。最初の6-7m四方の建物は1835年に完成し、増築を続け1844年には、30mx15m程の大きさになりました。1853年には、ピリ草の屋根が現代的な屋根に変換され、1917年に老朽化の為、屋根は再度新しい素材に変換されました。1967年の時点で教会は小さな集団によりまだ活用されていました。老朽化が進み、信者たちは教会の修復を望んでいましたが、後に断念する事になりました。

22. ケアナオヒナ

ケアナオヒナ、「ヒナの洞窟」は、ハワイ諸島において最も神聖な場所であるとされています。ヒナはモロカ'イ島の母であり、中にはハワイ諸島全体の祖であると言う者もいます。ヒナがすべての母で、クーがすべての父であるとされています。アリ'イ時代以前は、クーとヒナの石のみが活用されました。ティキやアリ'イの作った像や工芸品などは、古来存在しなかったのです。ハワイ諸島において、はじめて到来した人間がヒナであったとされています。このアリ'イ時代以前の古代人の事をムー、ムアイ、マイア、メネフネ、マナーフナ等と呼ぶ人々もいます。このヒナの洞窟はとても狭いもので、深さ1m20cmx高さ90cmx長さ35mくらいの空間でした。ヒナは、モロカ'イヌイの東のスロープにあるヒナ湾の溶岩棚の下の小さな空間に住んでいたのです。

1830年代に長老の一人がフォービス牧師に以下の様に述べました：彼女は自分の洞窟の前にある池で沐浴しました。沐浴をする前に祈りを捧げると池に水が流れてきて、満杯になりました。池はアジアンタムという種類のシダに覆われていました。池の廻りの平な岩の上で彼女は髪を乾かし、休みました。髪が乾くと彼女はまた洞窟に戻っていきます。その洞窟の前にはククイの木があり、その木が死んだり折れたりすると、すぐに新しい芽が変わりに生えてきたのです。

1936年モロカ'イ牧場のマネージャーであるジョージ・クックがこのエリアを訪れた時、ククイの木が洞窟の入り口に立っていた事を伝えています。古代の著名なライト・キャリアー（光の使者）たちは、ここに埋葬されました。洞窟内は神聖すぎたので、偉大なチーフ、予言者、カウラ、シャーマンたちは洞窟の廻りに埋葬されました。カネ-アライ、カイ-アケア、ラエらは、ここに埋葬されていると推測されます。ここを訪れる際には、きちんと準備しなければ入ってはいけません。行く前に体を清めて下さい。すべての石を手放し、純粋な気持ちで行って下さい。お供え物、食べ

物や花を持っていきたい人は持参してもかまいません。お供えをした後は、けしてモロカ'イの母に背を向けない様、後ずさりするように出て下さい。ラ'イレイ（ティーリーフのレイ）を必ず首にまわって行って下さい。

23. マプレフ

カイリ'オへの生誕の地です。マプレフは、一度はプ'ウホヌア（逃れの地）でした。カイリ'オヘが教えた諺の中に「マプレフの谷間に虹がかかった時は、ヴァイコロア（嵐）の風が来るかどうか確かめよ。その風が来る時は豪雨が降り、谷間に災害をもたらす。」

24. カルアヌイ（別名：カウラヘア/オコレポホポホ ヘイアウ）、マプレフ

クーとヒナに捧げるヘイアウで、豊穰、豊作を祈願する為にお供え物が成された場所。

このヘイアウの南東 30m 程の場所にある岩はヒナの岩として知られていました。コピコという名の男がこの岩の上で身を屈め、オコレ（尻）を空に向けていたのを目撃した三人の神官が、このヘイアウの名をオコレポホポホ（突き出した尻）に変えたのでした。

25. イリ'イリ'オ パエ ヘイアウ、マプレフ

古くは紀元前 2000 年よりハワイ諸島に移民して来た人々の事をアリ'イ時代以前の民と呼んでいます。その民が建設した最古の、そして最大のヘイアウです。このヘイアウの建設に用いられた石は、ヴァイラウ地区の海辺から、また山奥のトレイルから運ばれました。離れた土地からわざわざ運んだ理由は、すべてが調和のとれた状態にしたかったので、岩々と対話をして了解を得た岩だけを選んで運んだからです。最初は、近郊の地区に岩を探しに行きましたが、良い啓示を受けられなかったので、遠方まで行く事になりました。当時は、オーメン、啓示は、大変に重要視されており、そのサインに従う事が正しいと信じられていました。啓示が良ければ、その場所の岩を採取しました。啓示が悪ければ、他の場所を探しました。

当初、このヘイアウは大変に大きなものでした。長さ 920 フィート（約 280.5m）あり、マプレフの小川まで伸びていました。壁のある様式で少なくとも四つのテラスがあったと思われます。ここは、オハナ・タイプのあらゆるカフナのトレーニングの場として活用されました（オハナ・タイプとは、後に出現するパ'アオ カフナ 'アナ'アナのようなブラック・マジックをやるカフナに相反する善良なカフナの事を示しています）。

タヒチよりアリ'イたちが移住して来てからは信仰様式にも変化があり、おそらく 16、17 世紀頃からヘイアウはアリ'イが使うようになって行きます。チーフ カ'アラ ウオ ファの時代には、古来から居たライト・キャリアー（ヒーラーや神聖なカフナ）たちは、ヘイアウの使用を禁止され、アリ'イの崇拝する神々を祀り、アリ'イが率いるカフナ学校に使用されました。

アリイの時代、ヘイアウにおいて人間の生け贄の儀式が行われていたかどうかは、定かではありません。カフナ‘アナ’アナがヘイアウを乗っ取ってからは、ティキ像が神として祀られ、生け贄の儀式が行われていたと言ううわさもありましたが、それを否定する者もいます。私が得た情報からは、どちらが真実か確固たる証拠はありません。アリイがヘイアウで行っていた事は、何世紀にも渡ってアリイ以外の者に知らされる事ありませんでしたので、真相を追求は難しいです。もしも生け贄の儀式が行われていたとするならば、おそらく18世紀のマウイ島、オアフ島、ハワイ島のチーフたちによる戦争の時代だったと推測します。

付録 E

家系図、系譜と歴史

1 ペ’エルア コロイアアオ(男)

ペ’エルアという名前は、幼虫（毛虫）という意味から由来するとずっと思っていました。ルアは「洞窟」とか「洞穴」あるいは、「数字の2」や「ダブル」という意味があります。それから由来し、本来のペ’エルアの意味とは「二重に隠された洞窟」という意味があったのです。ペ’エルアは、嵐の中で、洞窟の中で若い女性が恋人と最初に落ち合った時に身ごもった子だったのです。

言い伝えによると、長老は男が洞窟から出ていく後を追って行くと彼は毛虫に姿を変えたというのです。故にその子供は毛虫という名前がつけられたと言われていましたが、当時毛虫は又へと呼ばれていた事もあり、「隠された洞窟」という意味の由来の方が正しいようです。

ペ’エルアは、いくつかの家を持っていました。一つはカオイオ、もう一つがカミロ ロア(現在ホテル・モロガイが在る場所)、あと一つはカウナ ラ ヘレハにありました。この家がカイ-アケア一族の主たる住居でした。

ペ'エルアは、ハワイ諸島全域において魚の網作りの名人として知られていました。とても丈夫で長持ちする網として有名でした。カメハメハ1世がモロカ'イ島を訪れた時、ペ'エルアの網を注文しました。

2 カイ-アケア(男)

一族の中で最も偉大なる存在であり、モロカ'イ島に住むすべてのハワイの血を継ぎ者の先祖にあたる人です。

彼は星を読む技を持ち、天文学にもたけていて、天候のサインも読み、動物、風、雲、海すべてを観察し、啓示を示す事ができた人物です。(その当時は、このような事は普通に考えられていて、多くの人がある程度はできるような時代でした。)彼は秀でる予言者であり、聖者として認知されており、彼の家はプ'ウホヌア(逃れの地)とされていました。彼は昔からある教えを重んじ、アリ'イたちの事を野蛮人と思い彼らが使うティキを自分のヘアウで祀るような事は一切しませんでした。彼は、生命、土地、海、空以外の神を祀る事はしませんでした。これらの自然は、すべての人々にとって神聖なものであると考えました。

彼は旅をするのが好きで、モロカ'イ島のクアロア、オロヴァル、カラエ、カラエオカラ'アウとカウナラヘレハに家がありました。晩年、カハヌイ(プ'ウカハヌイ)に家を建て、そこでスピリット・ピープル(霊)たちとのコンタクトがありました。

彼はすべての人々が平等に扱われるべきだと、カウヴァ(不可触賤民)たちの事を気の毒に思いました。「誰でも家と呼べる場所が必要だ」と彼は言い、カラエにある自分の家を彼らのコミュニティに与えました。この土地は家族にとって先祖の骨が埋めてある聖地だったので、これは大変大きな決断でした。モロカ'イ島の仕来りとして、最高位の長老たちに継承されて来た土地だったので、逆にこの土地を彼らに与える事によって、カイ-アケアは、人は皆平等であり、高位とか低位が存在しない事を訴えたかったのです。

彼は非常に強く、精力に溢れ、90代に入っても息子たちがカラエカラ'アウに井戸を掘る時も手伝った程です。

彼にまつわる話はたくさんあります。その多くのストーリーは、人は皆平等であるという事を信じる彼の非常に強い信念を物語るものでした。一つの伝説によると、彼は泉でアリ'イが自分の部下全員に先に水を飲まさなければ、アリ'イが水を飲めないようにしたという話です。もしもチーフが部下たちの前に押し入って水を飲もうとした時は、水が消えたと言います。

カイ-アケアは、家族の紋章となるタトゥーを入れていましたが、戦う事をしないという証拠に指の裏側に彫っていました。彼は、マウイ島、ハナのキハヴァヒネの教えに従っていると言われていました(しかし、実際に彼がハナに住んでいた記憶もないし、同じ時代に生きていた事も定かではありません)。

彼は、大人になってからはずっと教えを説いていました。子供たちに他人を傷つけないようにする方法のすべてを教えていました。その教えは彼と共に消えて行きました。

彼は、非常に自己主張の強い老人でしたが、皆に大変愛されていました。どれだけ愛されていたか、カメハメハ1世との最後の会合の時の話にそれを知る事ができます。

「王カメハメハは、カイ-アケアの事を父親あるいは祖父、長老といった存在として尊敬していました。誰よりもカイ-アケアに対して最も敬意ははらっていました。王カメハメハが 1819 年にコナへの帰り道、モロカイ島を訪問しました。その際、年老いて病に伏し寝床にいたカイ-アケアを訪ね、衣服を脱いでお腹の上に乗りました。それは、おそらく王がこよなく愛し尊敬する人に対する最愛と別れの表現だったのでしょう。この後、しばらくしてカイ-アケアは、息を引き取りました。」 M.ベックウィス、Hawaiian Mythology, 1970

カイ-アケアの意志、皆が平等に平和に暮らすという古代の生き方は、現在引き継がれているとは言いがたいですが、伝説は今も生き続けています。

カイ-アケアの最初の妻カラニ ポ'オ ア ペレ イオ ホラニは、ククイ アイ マカラニの娘であり、ククイ アイ マカラニは、クアリイ王とカウア'イ島のペレイオホラニ（男）の娘にあたります。

3 アイアレイ

カイ-アケアの母親であるという以外あまり知られていません。彼女の母方の祖母はケアヴェヌイ ア ウミ。父親の名は、カヴェロ ペエコア。カウア'イ島の一族の中で重要な存在でした。

4 アイカナカ

マウイ島ハナ、ムイレア、ホロノキウに生まれる。オネウリ ブ'ウ オライ ホヌアウアにて死去。イアオ ヴァレーに埋葬される。ヘレ パヴァ（マウイ島の歴史上重要なチーフ）の孫息子。

5 カネアラエ

彼女の名前のスペルは二通りあり、どちらが正しいのか定かではありません。彼女の両親は、ラエ ア ヌイ アカ カホ'オイオア ペフとリ'ア ヴァヒネ ルアヒヴァ（彼女も自分の本名が定かでなく、時にはだたルアヒヴァとだけ呼ばれました。カネアラエの娘の名もルアヒヴァでした。

6 カネホアラニ

歴史家の中には、これから語る伝説が同じ名前のもっと以前の人のものであると言う人もいます。私たちが調べたところ、同じ名前の方が過去にいましたが、その伝説の時代よりもっと昔の人であると思われます。二人共アメリカに旅した事があります。しかし、このカネホアラニは、コ

ルテズの時代に生きていた人物です。カネホアラニは、他の名前でも知られていました。彼はマウイ、あるいは彼の先祖の名前を継いでマウイ パウマクアと呼ばれていました。

オアフ島クアロアに主たる家を構えていました。彼はそこを拠点にし、大西洋を幅広く旅しました。中でも最も知られている旅が「亀の背中」(アメリカ)への旅です。インディアンの多くの種族が、海を渡って来て戦争を仕掛けなかったこの男について語っています。ズニ族は、彼が民に語る時に立った岩を誇らしげに見せます。ホピ族も彼の仲間が残り、その一部が自分たちの先祖であると語っています。コルテズの記録には、次のように記されています：

「モンテズマは、自分の陣営を率いて海辺で休息をとっていた。数日の休息をとった後戦場に戻ろうとしたところ、目の前に見慣れない光景が現れた。たくさんのカヌーが海に浮かんでいる。モンテズマが呼ばれ、その様子を観察した。我々の仲間ではないし、コルテズの陣営でもなさそうだ。全員、カヌーが近づいて来るのを待った。モンテズマの陣員が相手に威嚇するが、それに反撃する様子はなく、たった一人の男が両手を上げて向かってきた。手には何も持たず、体には腰巻きだけをまとっていた。手振りと簡単な言葉で彼は自分に戦う意志が無い事を告げた。我々は平和主義だと。

彼らはモンテズマたちとしばし暮らし、お互いの国の伝統について語り合った。たくさんのお話を交わした。モンテズマとコレテズの戦いが再開した時には、彼らは戦いには参加せず、まるで自分たちの仲間であるかのように負傷者の手当に従事した。モンテズマは重傷を負った。マウイという男が兄弟を扱うように最後まで献身的に世話をしていた。

マウイは、コレテズと行く気は無かったが、彼の仲間の一部は去って行った。他にもインディアン(メキシコ)と残った者もいた。スペインとメキシコの両方にマウイと共にきたがる者もいた。」

SEKAQUAPTEWA - ホピ族

デイビット マロは、こんな事を記録していました：

「カバオレ ヌイ、マカ アロヒオヒ、ケア アホオレホレ、マカ アア、カプアア ケオケオ ヌイ、マカ ウラウラ... (大きな外国人、太った頬、明るい目、赤い肌、頑丈な体系。。。)を彼は連れて帰ってきた。そして、彼らが先生や神官であると言った。その内の何人かはそうだったかもしれないが、彼の仲間があちらに残った事で航海のエキスパートが何名か引き換えに必要なだったに違いない。故に、何名が本当に先生や神官だったかは定かではない。」

ズニ族と四年を共にしたハレ マクア ケキノは、先代のマウイもメキシコやその北方を訪れた可能性があると考えます。ズニ族は、マウイの事を話しましたが時代がもっと前の事のように思われた。彼はメキシコとカリフォルニアの上から下まで旅したと言います。このマウイは、コルテズとモンテズマの時代と異なる内容なので、違う時代に到来していたとみられます。

7 ラエ

Fornander Vol.II、26 頁には、ラエが高位の神官だった事が記されています。彼が何を意味して、このように記したのかは定かではありません。私たちにとってラエは、マウイ島、オアフ島、モロカイ島に多くの土地を所有していた人物というだけです。彼が主とした、あるいは重要視した家は、オアフ島の現在カハラと呼ばれる地区にありました。彼のヘイアウは、現在カハラ モールが建つ位置にありました。彼の家は海岸に近い場所でした。

ポリネシアのはじまり

ヌ'ウ (男) – リリノエ (女)

ナル マナ マナ (男) – マナ マナ イア クルエア (女)

カイオラニ (男) – カヴァオヴァオイラニ (女)

ハクイモク (男) – ルイカポ (女)

ヌヌラニ (男) – ピリポ (女)

ホヌアオカモク (男) – アナ フル カポ (女)

ネ'エネ'エパプラニ (男) – ヴェヘカポ (女)

ヘレイクア ヒキナ (男) – ハラ カポ (女)

ケアオア パア パア (男) – カアオオ ラエ ラエ (女)

ルアヌ'ウ (男) – メエヒヴァ (女)

カラニ メネフネ (男) – カポ'オルヒナクアヒネ (女)

カイミプカク (男) – カポ'オルヒクパア (女)

ネヴェ ネヴェ マオリナイカヒキク (男) – ノヴェ ロヒキナ (女)

カオカオ カラニ (男) – ヘハカモク (女)

アニ アニ キ (男) – ケカイパホラ (女)
アニ アニ カラニ (男) – カメ'エヌイ ヒキナ (女)
オブカ ホヌア (男) – ラナ (女)
ヘキリ ガ'アカ (男) – オヒキマカ ロア (女)
アフル ガ'アラ (男) – ミヒ (女)
カプ'ウルラナ (男) – ホラニ (女)
ケカマルアハク (男) – ガ'アメア (女)
ラニ ピピリ (男) – ヒナイ マナウ (女)
ラ'アケア ラ'アコナ (男) – カマレイ ラニ (女)
ハヴァイ ロア (男) – ファラライ (女)

ハヴァイ ロア (男) – ファラライ (女) 以降の系譜

オアフ (女) – クヌイアケアケア (男)
クヌイアケア (男) – カヒキ ヴァレア'ア (女)
ケリ'イアリア (男) – カヒキ アリ'イ (女)
ケミリア (男) – ポラハイナアリ'イ (女)
ケリ'イク (男) – ケオウペアリ'イ (女)
クラニエフ (男) – カハカウアココ (女)

パパ (女) – ヴァケア (男)

このカップル (パパとヴァケア) は、A.D.0年頃に存在したと言われていています。ハワイの祖先系譜図において、幾つか異なる記録があり、それは100年程前後しますが、ハワイにとって非常に重要な存在です。家族の長老たちは、おそらくこの時代か少し前の時代にこの地に住み着いたと考えます。

ホ'オホクカラニ (女) – マノウルア'エ (男)
ヴァイア (男) – フフネ (女)
ヴァイロア (男) – ヒカヴァオブアラネア (女)
カカヒリ (男) – ハウラニ (女)
キア (男) – カモレ (女)
オレ (男) – ハイ'イ (女)
ブブエ (男) – カマヘレ (女)
マナク (男) – ヒコハアレ (女)
ヌカハコア (男) – コウラマ イカラニ (女)
ルアヌ'ウ (男) – カヴァ'ア マウケレ (女)
カヒコ (男) – カエア (女)

キ'イ (男) – ヒナ (女) 387 A.D.

(400A.D.頃に生まれたウルとナナウルという双子の両親)

この血統の系譜図は、Fornander, V.1. Appendix IX, p204 に記録されています。

ウル以降、パ'アオの時代までの系統

両親：キ'イとヒナ（時にはヒナ コウラと称される） 387 A.D.

アフキニーア ラ'ア(男) (およそ 1210 年) – ハイ ア カマイオ (女)

クマハナ (男) – カアウエアヌイ オ カ ラニ (女)

ルアヌウ (男) – カラニ モエイカヴァイカイ (女)

クコナ (男) – ラウプアプア マ'ア (女)

マノカラニ ポ (男) – ナエカプラニ (女)

カウマカア マノ (男) – カ ポイ ヌカイ (女)

カ ハクア カネ (男) – マヌ カイ コオ (女)

クヴァルパウ カ モク (男) (およそ 1420 年)– ハウメアヴァハウラ (女)

カハクマカパヴェオ (男) – カハク クカエナ(女)／兄妹

カラニククマ (男) – カポレイ カウイラ (女)

イリヒヴァ ラニ (男) (1510 年)–カミリ (女)

カウヒ ア ヒヴァ (男) – クエルアカヴァイ (女)

カヴェロマクルア (男) –

カヴェロ ペエコア (男) –

カウアカヴェロ アイ カナカ (男) – カネホアラニ (女)

クカラニ ハオウル'アエ (男) – アイ ア レイ(女)

カイアケア (男) (1720 年-1819 年)

ペエルア コロ'イアアオ (男) (1767 年-1866 年)

ペエルア コロ'イアアオは、数名の妻を持ち、モロカ'イ島とマウイ島に多くの子供を持つ。調査によって所在が明らかになった子供たちは以下の通りです：

ラエ (男)。ウミ (女) と結婚。

ハイナカロ (女)。サミュエル カマカウ (男)、歴史家と結婚。

ペエルア オピオ (男)。エープリル ナカエ (女) と結婚。

ナメアロハ ケキノ(男)。アナ ケ (女) と結婚。

ホセア (男)。マエア (女) と結婚。

イナイナ (男)。アニールアヒネ (女) と結婚。
ラハパヒナ'エア (女)。レイアロハマノ (男) と結婚。
カマイ (女)。レオヌイ イエイエ (男) と結婚。
カイリ'メエアウ (女)。マウレイア (男) と結婚。
クピヘア (男) –
キモ クハイモアナ (男) –
カイリ'オヘ (女)。カメ'エクア (男) と ウアウア (男) と結婚。

マヴェケ&マイオラアケアの子供である

ヒナ(女)– カマウアウア(男)の系統

ケオロエヴァ(男) – ヌアケア(女)。兄妹でもある。
カパウアヌアケア(女) 彼らの娘 – ラニレオ(男)
カマウリ ヴァヒネ(女) 彼らの娘は、二人の夫がいた：
ラニ アイ ク (男) – 兄か弟/第一の夫。マラマイ ハナ ア'エ/第二の夫。
フアラニ(女) 彼らの娘。カニパフ (男) と結婚。
彼らの息子カラフモクは、マウイ島ハナの統治者となる。

タヒチアンやサモアンが襲撃して来た時代、カニパフ (男) はモロカ'イ島を統治する長老の一人でした。(その時、島中の人々がチャントを唄い、敵陣を追い払った話が有名ですが、その時にチャントの指揮をとったのが彼でした。) カニパフの主たる家はカラエにあり、そこで死去しています。初期のハワイ歴史家が全員一致で記録している内容としてパ'アオが彼の家に来て、自分と一緒にハワイ島に戻り、コナとカハラの統治者になる事を提案してきた話がある。カニパフは、聞きました。「どうして私を探したのですか？」パ'アオは、「君のマナがとても強いからだ。」と答えました。「ヴァイマヌに住む私の息子カラパナの所に行きなさい。彼は母親アライ カウアココと一緒に暮らしているから。彼を連れて行き王にするといい。」とカニパフは言いました。パ'アオはカニパフの事は断念し、息子カラパナのいるヴァイマヌに行きました。カラパナはパ'アオに同意し、王になる為にハワイ島に行きました。パ'アオと共に彼のカフナ ヌイとして統治者となりました。これが 13 世紀に起きた事を知っているのです。パ'アオが軍団を率いて戻って来た時期も正確に把握しています。

カニパフとフアラニの息子：カラフモクがラアメアと結婚。
彼らの息子：イキ ア ラアメアと娘：カラメアが結婚。
その娘：カマナワヴァがクアイヴァと結婚。
その息子：エフがカポハウオラと結婚。
その息子：エフヌイカイマリノがケアナと結婚。

その娘：アフリがパウラと結婚。

その息子：パニカイアイキがパレナと結婚。

その娘：アフリヌイカ'アペアペがコイノホと結婚。

その息子：カイリ オ キハがフアレイ ア ケアと結婚。

その娘：モクオフアレイ ア ケアがウミ ア リロアと結婚。

カニパフとアライ カウアココの息子：カラパナはマケ ア マ ラ ハナ'エ(カマウリ ヴァヒネとマラマイ
ハナ ア'エの娘)(前頁を参照)

その息子：カハイ モエ レアイカプオ'オ が カポアカウルハイラアと結婚。

その息子：カラウ ヌイ オ フアがカヘカと結婚。

その息子：クアイヴァ（上に参照）がカムレイ ラニを二人目の妻とする。

その息子：カホウ カプがララ カプと結婚。

その息子：カウホラヌイ マフがネウラと結婚。

その息子：キハがヴァイアレアと結婚。

彼らはハワイ島の聖なるチーフ、リロアの両親。

ヴァイアレア、リロアの母親は、カウホラというもう一人の夫がいた。

その息子：クイ クイ, リロアの弟となる。

彼の二人の娘：

- 1) 偉大な聖なる女性のチーフ、統治者であったケアカマハナ
- 2) カイアケアの曾祖母、カネオアラニの祖母、カライキイキ

付録 F アロハの再会

1983年11月は、カヘキリがカプアレイの土地をマカ マヴェリヴェリへ譲渡した日から200年記念の時期でした。私たちの家族の一員は、それ依頼ずっとその土地に暮らしてきました。長老たちが、カメ'エクアの一族を記念すべく祝賀パーティーを開催しようと決めました。もちろん、開催地はカプアレイでした。祖母カイリ'オへと他の長老たちが長年住み、その子供たちも暮らした土地で開催するパーティーとなりました。開催委員会が結成され、食事もたくさん提供され、たくさんの人が手伝ってくれました。他の島からも親戚が集まり、アメリカ本土からも一家族参加しました。パイアナ（パーティー）は、オハナ・スタイルの昔のやり方です。大きなテントがカイリ'オへの古い家の前庭にマヒ'アイ家によって掲げられました。伝統的な仕来りとして、週末のそのイベントは、まずカイリ'オへとマカ ヴェリヴェリへの敬意を込めてお墓参りからはじまりました。その後、島のツアーがあり、長老たちから主要な箇所ですこにまつわる家族の歴史、子供の頃の思い出話を語りました。

土曜日の夜には、系譜とその歴史を物語る会が開かれました。家族の系図をすべて把握したサンフォード カメ'エクアは、大きな黒板にチョークでその系図を書き、名字がなぜ皆異なるのかを説明しました。それぞれの家族の年代の古い順から説明されました。

日曜日には、その古き良き家で宴会となりました。はじめに、チャントとプレ（祈り）が唄われ、神の祝福とこの記念すべき日の祝賀を分かち合うカイヴィ(先祖たち)を招き入れます。皆目に涙を浮かべていました。その後は、それぞれの特技の披露です。全員が踊ったり、唄ったり、楽器を弾いて楽しみました。別れがたく、皆再会を愛おしんでいました。

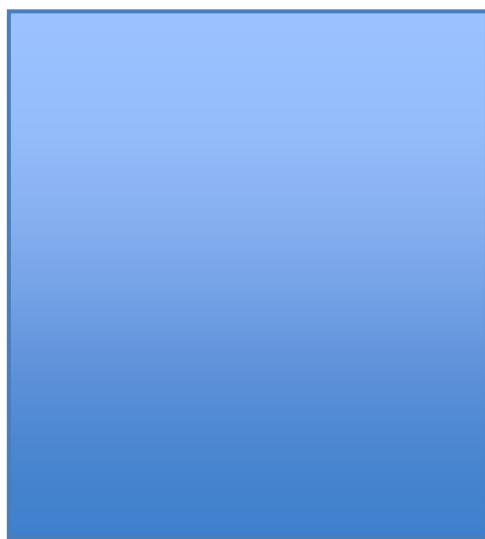
次の同窓会は、1987年の11月に開催されました。今回は、カイリ'オへの兄妹たちの家族も参加したので、'オハナはより一層大きくなり、'オハナ ペ'エルアと名付けられました。（ペ'エルアは、カイリ'オへの父親であり、それ以外にも東モロカ'イ島にたくさんの家族を持っていました。）

この再会の宴は、オ'アフにてもう少しモダンなセッティングで行われました。系譜を語る夜は、エヴァ・ビーチのグレグ ケリイヌイ（カメ'エクア家の長老の一人）の家で開催されました。歴史と家系図が再び説明されました。大きなボードが裏庭に設置され、系図が表示され、全体のどこに誰が位置するかを確認する事ができました。

パーティーは、ハイク・ガーデンズでプロのミュージシャンを呼んでの盛大な会でした。家族のメンバーも加わり音楽と踊りが続きました。

この再会の宴では、新しい企画がありました。1983年に既に決定していたアイディアで、ライト・キャリアー（光の使者）として活躍してきた人を紹介して、家族に認識してもらおうというものでした。最初の「光のボール」賞は、全員一致でニュース・キャスターであるレイ ラヴェルに与える事に決まりました。彼は、モロカ'イ島を訪れ、家族の本である「Tales From The Night Rainbow (夜の虹の物語)」のドキュメンタリーの製作を手がけてくれたのです。

「光のボール」賞の受賞式は、宴の中、皆が食事を楽しみながら行われました。一人の長老が声をあげます。「おい！レイが俺たちの仲間になったぞ！俺たちと同じように考え、俺たちの道を理解している。彼をハナイ（養子）にして、彼を正式に迎え入れようじゃないか」。レイは、受賞され名前を呼ばれた事だけでも驚いていましたが、更にカメ'エクアの'オハナ（家族）とペ'エルアの'オハナにハナイの弟として迎えられた事に多いに驚きました（全員が立って拍手喝采となりました）。



レイ ラヴェルは、テネシー州、ノックスビルに生まれ、ケンタッキー大学でジャーナリズムを学んだ後、ケンタッキー州レキシントンのラジオ局にてジャーナリストとしてキャリアをはじめました。

レイがレキシントンのテレビ局のニュース・チャンネルのディレクターの職についていた時、彼がずっと抱いていたハワイへの思いが呼ばれるように強くなって行きます。ハワイに関する、本をすべて読み、映画をすべて観賞し、ハワイに行った事のある人をつかまえては、しつこく色々問いました。

1970年の春、彼はホノルルのニュース専門のラジオ局のレポーターの仕事にありつきます。3年半後には、ハワイのニュース・チャンネル2, KHON-TVのスタッフの座を獲得しました。

1980年2月に、カレン ゼーンとカヴァイアホア教会にて結婚式を上げました。そして、二人の子供、マーク ゼーン ラヴェルが同年10月15日に生まれ、続いて1984年10月11日にメリサ プアオラマイカラニ ラヴェルが誕生しました、ラヴェルの子供たちとカレンはハワイの血統を継いでいる事を誇りに思っていました。家族は、みんなハワイの文化について興味を持ち、もっと学びたいと思っていました。カレンのその好奇心のおかげで、この本「夜の虹の物語」を読み、またレイにも本を紹介するに至ったのです。レイは、この本を読んだだけでは治まらず、テレビのドキュメンタリー番組として、そのエッセンスを自分なりにまとめて放映したいと考えたのです。彼は、ココとパリにその機会を与えてくれた事に感謝しています。テディー マヒアイと亡きジェズ ペ'エルア叔父さんは、モロカ'イでの撮影をする際、たくさんの事を教えてくれました。レイは、ペ'エルアの一族から与えられたアロハと愛に多いに感謝し、「夜の虹の向こう側からカイリ'オヘ カメ'エクアのスピリットの存在を感じています。私たちに自分の物語を語ってくれた彼女に尊敬の念と感謝を贈ります」と言いました。

1989年には、また同窓会が開催される運びとなりました。当初はモロカ'イでもう一度開催しようという案がありましたが、多くの親族が仕事を探しにオ'アフに引っ越した為、オ'アフにて開催する事の方が現実的だったので、そうする事になりました。

同窓会をできるだけ、オールド・タイムの雰囲気にしたかったので、遠方から来た親族も皆週末をカイルア キャンプで過ごす事にしました。テディー マヒ'アイをスピーカーとして家族の夜の宴がはじまりました。彼は、モロカ'イで長老たちと共に幼少時代を過ごした時の話をしてくれました。まだ幼く、ただ皆について廻り、聞いている事もよく意味がわからずいしましたが、大人になるにつれ、その頃聞いた話がようやく府に落ちて来た事。昔の農業の技法や丘に段々畑やヘイアウを築く方法、魚を釣る方法、島のどこに行くかどうか等、色々話してくれました。リム、海藻の養殖について、また有名だったカマロのリム'エリ'エリという海藻の話もしてくれました。聞いている者たちに、知識を与え、実際に実技も少々教えてくれました。

土曜日は、トーク・ストーリーの後、クニア キャンプの体育館に移動し、宴会となりました。夕食のケータリングは、カイリ'オへの長女アニー ルアヒネの祖先となるナカガワ家によって用意されました。音楽やエンターテイメントが親族によって披露されました。今年の「光のボール」賞は、当初ティオドール マヒ'アイに渡される予定でしたが、仕切りの長老たちと相談した結果、テディーがこの本の製作に時間と労力を費やしたパリ リーに敬意を贈り、賞を上げようという提案になりました。

パリ ジェイ リーは、1926年11月26日に生まれました。ハワイ大学とミシガン州立大学で教育を受けました。1945年4月7日に旧友のリチャード・H・W・リーと結婚。1947年に夫リチャードは、心理学の博士号を取得する為に妻と赤ん坊を連れてアメリカ

本土に渡りました。20年後にパリはハワイに戻る事になります。この結婚は、5人の娘を作りました：ラニ キャサリン ロケラニ ニッテラ；カリン エリザベス カハラナナニ ヴァイリン；オナ グウレイ ヴァイモイ；ロレーン ブレット ケハウラニ ヴァイチンとロビンルーズ マイレ。

結婚が崩壊してから、パリはサンフランシスコに引っ越し、その後下の娘たちが学校に通い仕事をしているハワイに戻ります。一時期、ホノルルのビジョップ博物館の人類学の分野において調査委員のアシスタントとして勤めました。

1978年にジョン ココ ウィリスと再婚しました。1983年に博物館での勤務から退き、カメ'エクアー族の物語と歴史を保存する為にすべての時間とエネルギーを費やす事に専念しました。

六冊の自作本と共同製作の二冊を出版しています。その業績から多くの賞を授与していて、Directory of International Biography (国際伝記名録) である、Who's Who in American Women; Who's Who in the West; Who's Who in the World and Contemporary Authors などに登録されています。

付録 G

下記に記す内容は、ある時代認識されていたけれど、忘れ去られた事項です。またハワイに移民して来た人々は全く認識していない内容です。(ハワイ諸島以外から移民してすべての人々を指します。)

1) 1852年、ハワイは立憲政府を保有していました。1855年1月11日、アレクサンダー リホリホは、カメハメハ4世として即位しました。ハワイ王国の憲法を維持し、法律に従い基づき国を統治する事を宣誓しました。「今日この日に正式な誓約として、全知全能の神の名の元に、議会と皆さんの目の前で、憲法の保護を誓います。これはけしたただのアイドルのセレモニーではありません。私が保護を誓ったこの憲法は、自由、正義、平等という不変の基本理念に深く根付いたものであり、これらの理念にのみに導かれて、政府を運営していける事を真に願っています。」

2) ハワイには、1845年から1848年の間、サンフランシスコとホノルル間の郵便配達が行われていました。配達頻度は、比較的定期的に運搬されていました。ホノルルで販売されていたポリネシアン新聞の1855年6月30日付の記事にニューヨーク市からホノルルに手紙が35日で到着した事が掲載されました。当時はまだ大陸を横断するルートは開発されておらず、パナマのサン・ブラス諸島やメキシコのマサトラン経由で乗り換えての運搬でした。

3) オアフ島のパリ・トレールは、1845年に道が広げられ砂利が引かれました。1861年には、馬車が通れるように更に改善されました。この道は、その頃から”around-the-island-road (島一周できる道)”と呼ばれるようになりますが、後にカメハメハ・ハイウェイと命名され、同年ホノルル-エヴァ間が更に改善されました。1862年の新聞に「フォード博士がホノルルからライエまで運転し、往復8時間かかった。」と記されていました。

1862年、マウイ島の新聞の記事には「ワイルクからマカヴァオ経由でウルパラクアまで、およそ40マイルの区間荷物の運搬が可能な良い道ができた。」と記録されています。ハワイ島では、1849年より港があるカイルア、コナとヒロを繋げるための道を作る為に数年にかけて大変な労力が費やされていましたが、残念ながら途中で中止となりました。1860年代にもう少し工事しやすいルートを選び、ようやく通行が可能となりました。

4) ハワイ諸島は、1844年にキリスト教団の委員会と宣教師たちが到来してから「キリスト教の国」と考えられていました。ハワイ諸島を基点に廻りの島々に宣教師たちが派遣されていました。

5) 印刷会社として米国で最初のウェスト・オブ・ミシシッピーが1820年11月、ホノルルに進出。1822年には、学校や教会の教材の印刷が常時行われるようになっていました。

6) 1834年には、二つの新聞社が誕生します：マウイ島ラハイナのカラマ新聞とオアフ島ホノルルのケクム新聞。

7) 1854年には、ハワイは読み書きができる人口が、同じ人口の都市に比較し実質上世界で一番となりました。これは、人々が家族単位で学校に通いはじめたからです。老若男女すべてが通っており、ほとんどの人がハワイ語と英語の両方で読み書きができるようになっていました。ただ英語で会話するようになるのは、もう少し後の事でした。

8) ゴールドラッシュ時代には、米国本土の西部の需要の多くはハワイ諸島からの供給で賄われていました。食物とオイル・ランプ用のオイルやその他多くの物を生産していました。後に有名になったアイダホ・ポテトは、その後アイルランドにも行きアイリッシュ・ポテトという名前が付きましたが、元々はハワイ（ポリネシア）からはじまったジャガイモで、炭鉱労働者の食事としてハワイから輸送されていました。ヤムイモも輸出された食品の一つでしたが、人気が出るには少々時間がかかりました。

9) 観光業界がイメージするハワイの人々は、「無知で野蛮な風変わりな島人たち」のようでしたが、私たちは 1778 年に政府を築き、1800 年には中国、日本、イギリス、フランス、ポルトガル、スペインと貿易をしていました。1810 年には、ドイツとロシアとも貿易をしていました。後にアメリカ合衆国となった地域だけが我々を「取るに足らない存在」として見ていたのです。

10) 1886 年 7 月 20 日、イオラニ宮殿は電燈で照らされ、同年議会が予算を廻し、ホノルルの町全体に電燈が設置されるようになりました。

11) 1878 年にマウイ島で最初の電話回線が設立しました。ホノルルは、翌年の 1879 年に開通します。1880 年にハワイ・ベル・テレフォン・カンパニーが設立しました。

12) 大きな誤解を解く為にここで明白にしたいのですが、キャプテン・クックは、食べられたわけではありません。ハワイアンもタヒチアンもトンガの人も人食人種ではありません。キャプテン・クックが死んだ時には、高位のチーフと同等の埋葬が行われました。骨のみが埋葬されるという習慣があった為、肉は骨の廻りからはずされたのは確かです。骨は高位のチーフ、パアレアによって、彼の羽のケープに包まれ丁寧に扱われ、船で運ばれました。船人たちは、その肉が食べられたのではないかと思っていたのですが、それは事実ではありません。イギリスに船がキャプテン不在で帰還した時に、そのうわさが流れたようです。数年かけて、その作り話はハワイにも戻ってきました。ハワイアンはそれが馬鹿げた面白い話だと思い、全くの逸話であったにも関わらず、ふざけて怪談の様に人を怖がらせて遊び、またそれが信じられてしまったのです。アメリカ人であった隣人もそのうわさを信じてしまっていました。今日、まだその逸話を本当の話だと信じてしまっている人たちがいるようです。

13) ハワイの人々はどこから来たのか？ ツアーガイドは、この質問を毎日のように浴びています。ハワイアンがハワイ諸島に到来したのは、1200 年辺りだと主張した人もいましたが、これは現在間違った見解であると証明されています。このような質問をする人たちは、おそらく曾祖父母くらいまでは追跡できるのでしょうか。ドイツ、アイルランド、イギリス等から来たという事までは追跡できるでしょう。

私たちポリネシア人は、先祖の名前、その経路を西暦 0 年まで追跡する事が可能です。モ'オ族は、紀元前 800 年まで遡る系図があります。

それでも、質問する人たちは満足しません。「でも、どこから来たの？」彼らが本当に知りたいのは、ハワイの人たちがアフリカから来たのかどうか、という事だったのです。リチャードリーキーの仮説は大変広く知られていますが、地球外から降りて来たと考える以外は、人類はアフリカから始まっているようですから、それはある意味では正しいでしょう。カリフォルニア大学の人

類学者のパトリック・カークは、放射年代測定法による、ここ 3000~4000 年の太平洋周辺の地質、人工遺物等の調査を数年行い、ポリネシア人は、海に住む放浪人たちを先祖に持ち、海を子供が知る母のように知り尽くしていたという結論に達しました。彼の仮説によると、人々はハワイ諸島に方々から来て自分たちの文化を持ってきました。多くはインドや中国からでした。多くは船で旅をし、ハワイ諸島からメキシコや現在のアメリカ北部にも渡りました。日本や沖縄からもある時点から到来が始まりました。トンガ人となる人々が初めて移動するのをやめ、一カ所に定着しました。彼はこれが紀元前 3500 年だったと主張しています。次の 500 年の間に多くの島で人々が移動をやめ定着するようになったそうです。定住する家建て、灌漑用の水路、丘に段々畑を作り、人々は定住する計画を進めて行ったのです。今ハワイと呼ばれる島々も同じ様に人々が定着して行ったのです。年を重ねて、マルケサス、タヒチ、サモア、日本、メキシコ、現在のアメリカ（昔は色々な名前が地域ごとにありました。）などから到来したのです。それならハワイアンとは誰なのでしょう？どこから来たのでしょうか？人類皆家族という事です。皆色々な所から来たのです。皆、皆の一部なのです。彼らはアロハで生きる事を学んだ人たちです。平和に生きる事ができる事を証明した人たちでした。

参考文献一覧：

- Beckwith, Martha. *Hawaiian Mythology*. University Press of Hawaii, Honolulu, 1970
- Brigham, W.T. *Ancient Worship of the Hawaiian Islands*. Bishop Museum manuscript, 1908.
- Cartwright, Bruce. *Place Names of Moloka'i*. Bishop Museum manuscript, 1922. Cooke, George P. *Moololo o Moloka'i*. 1949
- Daws, Gavin. *Shoal of Time. A History of the Hawaiian Islands*. University of Hawaii, Honolulu, Hawaii, 1969.
- Emerson, J.S. *The Old Gods*. Hawaiian Ethnological Notes, vol. 1 page 641, 1918.
- Emerson, J.S. *Kalai Pahoa Tree of Moloka'i*. Hawaiian Ethnological Notes, vol.2 pgs. 111-113, Bishop Museum manuscript, 1918.
- Forbes, Rev. A.O. *Ai Kanaka, a Legend of Moloka'i* in Thrum's Hawaiian Folk Tales, 1907
- Fornander, Abraham. *An account of the Polynesian Race, Its Origins and Migrations*. Vol. 2, 1880
- Fornander, Abraham. *Hawaiian Antiquities and Folk-Lore*. Memoirs, vol. 4, 1916. Grant Book. Vol.10, Microfilm box 3, Hawaii State Land Office, Honolulu, Hawaii, January 29, 1865
- Hawaiian Government Survey. W.D. Alexander, Surveyor General, 1897.
- Hitchcock, H.R. "Touring Moloka'i." Ke Kumu Hawai'i. Children's Mission Society Library manuscript, 1836.
- Hyde, C.M. "Rambling Notes on Moloka'i." Hawaiian GAZETTER, September 17, 1895.
- Ii, John Papa. *Fragments of Hawaiian History*. Bishop Museum Press, 1959.
- Judd IV, Gerritt P. *Pule o o: The Story of Moloka'i*. 1936.
- Kamakau, Samuel M. *Ruling Chiefs of Hawaii*. Kamehameha Schools, 1961.

Kamakau, Samuel M. *Ka Po'e Kahiko*. Bishop Museum Special Publication 51, 1964.

Kanepu'u, J.H. "Traveling About on Moloka'i" Ke Au Oko'a, September 5, 1867.

Ka Nupepa Ku'oko'a. *Answer to Lanikaula*. July 18, 1868.

Na Nupepa Ku'oko'a. *The Spring of 'Olo'Olo*, Moloka'i. May 4, 1922.

Ka Nupepa Ku'oko'a. *A Tale of the Kona Side of Moloka'i in the Days of Kamehameha the Conqueror*. Manuscript translation by E.P. Sterling, May 11, 1922.

Kaulili Solomon K. *About the Menehune*. Bishop Museum Manuscript, vol.1, pg. 407. Translation by Mary Pukui. (no date).

Kuapu'u, S.K. *He Wahi Mo'olelo*, State Archives, 1861.

Land Commission Awards (LCA). Native Testimony Book 16, pg. 56, 1853.

Lonohiwa, David M. *The Legend Trees of Hawaii - Poison God of Moloka'i*. Paradise of Pacific, 10-12, 1905.

Malo, David. *Hawaiian Antiquities*. Translated 1898 by Dr. N.B. Emerson, Bishop Museum Special Publication 2, 1951.

Mertz, Henriette. *Gods from the Far East: How the Chinese Discovered America*. Ballantine Books, New York, 1972.

Missionary Herald. "Sandwich Islands: A Joint Letter of Missionaries on the Islands of Maui and Moloka'i" Dated November 29, 1831, 1832.

Monsarrat, M.D. *Diary of Moloka'i Survey*. Manuscript, State Surveyor's Office, 1884.

Monsarrat, M.D. *Moloka'i Surveys*. Manuscript, State Surveyor's Office, 1886.

Paheeikauai, R.K. "News of Moloka'i." Ka Nupepa Ku'oko'a, August 7, 1875.

Prescott, William Hickman. *Conquest of Mexico*. Modern Library Edition, Random House, 1796-1859.

Reader's Digest. "Dragon Ships Before Columbus." Jay Stuller, June 1983.

Rice, William Hyde. *Hawaiian Legends*. Bishop Museum Bulletin 3.

Stewart, Charles Samuel. *Journal of a Resident of the Sandwich Islands in the Years 1823, 1824 and 1825*. University of Hawaii Press, 1970.

Stokes, John F.G. *Map of Moloka'i*. Government Survey Chart #426, "Stokes' Heiau Locations," Bishop Museum manuscript.

Summers, Catherine C. *Moloka'i: A Site Survey*. Pacific Anthropological records #14, Bishop Museum.

Tapes of Conversations with Native Hawaiians: H-91, H-91g, H-91k, H-92f. Bishop Museum.

Thrum, Thomas G. *Tales from the Temples*. Hawaiian Almanac pg. 49-54, 1909.

Waiamau, J. *Ka Hoomana Kahiko (Ancient Worship)*. Manuscript translation by Thrum. Ka Nupepa Ku'oko'a, January 19, 1865.

カウア ココ ウラ（通称ココ）ウィリスは、ライダ ケアロハ'オハナ パイア カペラとキモ カペラの息子です。彼は、カパフルにあるアラ ヴァイ運河周辺にある有名なパイア区域に住む祖母カウアイ パイアに育てられました。

ココは、ハワイアナ・ユニット・オブ・ザ・シティー、ホノルルの行政機関とビショップ・博物館にて勤務しています。

彼は、'オハナ パイア-カペラ-ウィリスの長老の長を務め、更に'オハナ カメ'エクアの4名の長老長の一人です。

パリ ジェー リーは、引退した司書です。彼女は、国際的に知られる歴史研究者であり、'オハナ カメ'エクアの系譜—歴史研究委員会の会長です。

写真

著者：パリ ジェーリーとジョン ココ ウィリス